

昭和53年度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



昭和54年4月

奈良国立文化財研究所

昭和53年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報 正誤表

P. L		誤	正
3	21	和同年間	和銅年間
3	23	検出し。	検出した。
4	8~9	東西大垣	東西大垣
6	2	S F 9045	S F 9044
7	14	(310)尺	(310)尺
7	23	S B 4079	S B 9079
7	25	期以前	A期以前
7	26	S D 9062	S D 9092
8	2	里多	里名
8	26~27	北隅	北限
9	第2図	D期 S B 9072	S A 9060
"	"	D期	東南の南北棟を S B 9072
10	2	間鑿	間鑿
10	11	遊走道	遊歩道
10	23	和同年間	和銅年間
13	4	表掘り	索掘り
13	9	第4 整地	第4次整地
13	10	S D 8550	S B 8550
14	5	檻板	塙板
16	9	出土 器	出土土器
18~19	第4図	S 9145 A	S X 9145 A
28	23	S T 236	S K 236
29	17	檻	塙
32	2	からに	さらに
33	18	瓦層	瓦層



平城宮跡発掘調査位置図

表紙カットは平城宮跡大極殿跡調査前全景

目 次

I	東院地区の調査（第 110 次）	3
II	推定第一次朝堂院地区の調査（第 111 次）	11
III	大極殿跡の調査（第 113 次）	17
IV	平城京の調査	
①	右京一条三坊三・四坪の調査（第 112 次 - 1 次）	25
②	左京三条二坊七坪の調査（第 112 次 - 3 次）	27
③	北辺三坊一・二・三・四坪の調査（第 112 - 4 次）	28
④	北辺二坊二坪の調査（第 112 次 - 7 次）	29
⑤	右京一条二坊二坪の調査（第 112 次 - 8 次）	30
⑥	右京五条二坊十二坪の調査（第 112 次 - 9 次）	32
⑦	南面大垣の調査（第 112 次 - 11 次）	33
V	頭塔の調査	34
VI	寺院の調査	
①	東大寺南面大垣の調査	38
②	薬師寺宝積院の調査	39
③	法隆寺西南院の調査	41
④	唐招提寺戒壇の調査	45

昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和53年度の発掘調査を次表のように実施した。以下概要を報告する。

※本概報に収録

次 数	調 査 地 区	面 積	調 査 期 間	備 考
●110	東院地区	2,100 ^{53年}	6.28~11.13	
●111	第一次朝堂院	3,300	4.03~7.15	
●112- 1	右京一条三坊二・四坪 (奈良市西大寺町上瀬)	490 2414	5.02~5.30	西大寺マンション建設予定地
2	北辺坊一坊大路 (" 山陵町2068-4)	4.5	5.04~5.09	笠井義光氏宅
● 3	左京三条二坊七坪 (" 新町116-1)	301	7.01~7.25	東洋シール工業
● 4	北辺三坊一・二・三・四坪(" 西大寺新町158)	284	8.07~8.22	三和住宅
5	法華寺旧境内 (" 法華寺東町1231)	6	8.17	鹿野幸男氏宅
6	右京一条二坊六坪 (" 佐紀西町36-1)	42	9.20~9.22	共同住宅新築予定地
● 7	北辺二坊二坪 (" 山陵町南代86-88)	360	10.01~11.16	ファミリー駐車場
● 8	右京一条二坊二坪 (" 二条町1-28-40+)	350 42	11.05~11.16	ファミリー駐車場
● 9	右京五条二坊十二坪 (" 五条町355-2)	60	11.21~12.04	伊藤恭一氏宅
10	法華寺旧境内 (" 法華寺町字脇外)	12 54年	12.23~12.27	橋本正路氏宅
● 11	平城宮南面大垣 (" 二条町1-42-3)	40	3.15~3.19	
12	左京一条二坊十坪 (" 法華寺北町959)	3	3.26~3.27	川崎泰信氏宅
13	右京一条二坊七坪 (" 二条町1-42-3)	20 53年 54年	3.27~3.28	藤田裕太郎氏宅
●113	第二次大極殿	2,100 53年	10.01~2.07	
●114	頭塔跡 (奈良市高畠町字頭塔町)	197 54年	7.17~8.16	奈良県老人福祉センター
115- 1	平城ニュータウン13号地点 (" 歌姫町1857)	200	1.13~1.26	住宅公团平城ニュータウン 予定地
2	平城ニュータウン14号地点 (" 歌姫町1857)	132	1.20~1.25	"
3	" 音如谷 (京都府相楽郡木津町)	2,100 音如谷	1.08~3.31	"
4	" 石のカラト (奈良市山陵町別当谷)	313	1.09~3.31	"
5	" 曽根山地区 (京都府相楽郡木津町)	50 曾根山	3.06~3.12	"
6	" 曽根山地区 (" 音如谷)	38 53年	3.07~3.12	"
●(その他)	唐招提寺戒壇院 (奈良市尼ヶ辻町4)	57	5.29~6.22	
	西大寺金堂院 (" 西大寺町)	18	10.25~10.27	
●	薬師寺宝積院 (" 西ノ京町388-1)	90	12.11~12.25	
●	東大寺南面大垣 (" 水門町100)	32.5 53年 54年	8.17~8.29	
●	法隆寺西南院 (生駒郡斑鳩町人字法隆寺)	280	12.07~1.25	

昭和53年度発掘調査一覧表

I 東院地区の調査（第110次）

調査区は平城宮東院東南隅に位置し、1971年度に実施した第99次発掘調査区の北側にある。調査区の北は一段高く、東と南は一段低い平地で、西は宇奈多理神社の境内地に接する。第99次の調査によって、調査区の南で園池SG5800を含む大規模な庭園遺構を明らかにし、また東は東一坊坊間大路に接することが分っている。今回、この庭園の北の一角を明らかとするために、1978年6月28日から同年11月13日まで発掘調査を実施した。

遺構

奈良時代の遺構検出面は調査区の北で現地表下約0.2m、南で約1.0mである。自然地形は西北に高く、東南に低い。調査区の北半部では灰色粘質砂層（床土）の下に黄褐色土の自然堆積層を露呈するが、南半部では灰黒色粘土の上に厚さ0.7mの整地土が堆積する。整地の状況は自然地形の傾斜に応じて複雑であるが、上層（黄褐色砂質土・黄褐色バラス土・灰色バラス土）、中層（黄褐色粘質土）、下層（淡褐色砂質土）の3層に大別できる。この整地土は、調査区の南端部近くでは中世に削平され、中央部付近では攪乱による破壊をうけている。検出遺構はA期前、A～G期の8期に区分でき、下層整地面でA～D期、中層整地面でE期、上層整地面でF・G期の遺構を検出した。主な遺構は、掘立柱建物12棟、礎石建物4棟、掘立柱塀5条、溝19条、石敷道路3条、土壙などである。調査区の東北部で遺構の重複状況が著しい。

A期以前　　東面築地大垣築造前の時期で、遺構は一部確認したのみである。

SD9041は東面大垣に近接して西肩掘込み部分を小トレンチで確認した斜行溝である。板材に細い丸杭を千鳥状に打ち、護岸とする。和同年間とみられる木簡断片、および平城宮I期の土器が出土。

SD9042は幅0.15m、深さ0.1mの斜行溝で北端中央部で検出し。厚さ0.5cm、幅10cmほどの薄板を溝の側壁とする。長さ約3mを残すのみである。

SK9090は調査区の中央東寄りにある径1.0m、深さ0.6mほどの円形土壙。埋

土から木簡断片、および木屑が出土。

SB9084は調査区の東北隅で検出。南北2間以上、東西1間以上で南北棟の西庇に相当する可能性が高い。新旧の造替がある。疎混り青灰粘質土の下層整地面で検出したが、この整地上の広がりは不明。

SB9085は調査区の西南端で検出。東西方向の柱掘形3間のみを確認。自然層（黒色砂質土）上面で検出した。

A期 東面の築地大垣SA5900を築造し、大垣に接して東西棟SB9065・9066を2棟並べ、石組溝SD9045・9052・9083をつくる。調査区を東に拡張して東西大垣を確認した。西側溝SD9040、暗渠SD9056ともに同位置で新旧の重複がある。そのうち旧期のものは下層の整地と一連のものである。

SD9040-Aは溝幅0.5m、側石には径約40cmの自然石を組み、底に小礫を敷く。第44次調査のSD5815を大垣東側溝とすると両者の心々距離は約6mである。

SD9056-Aは厚さ約10cmの厚板を底に3枚、両側壁に各1枚を組合せた木樋暗渠である。底板の長さは6.90m、側板の長さは6.00m。内法寸法は幅55cm、高さ30cmである。樋内には灰色砂がつまり、平城宮I・II期の土器が出土した。

大垣築成土は、地業をせずに黄褐粘質土を乱雑に積み上げたもので、高さ約1mほどが残る。

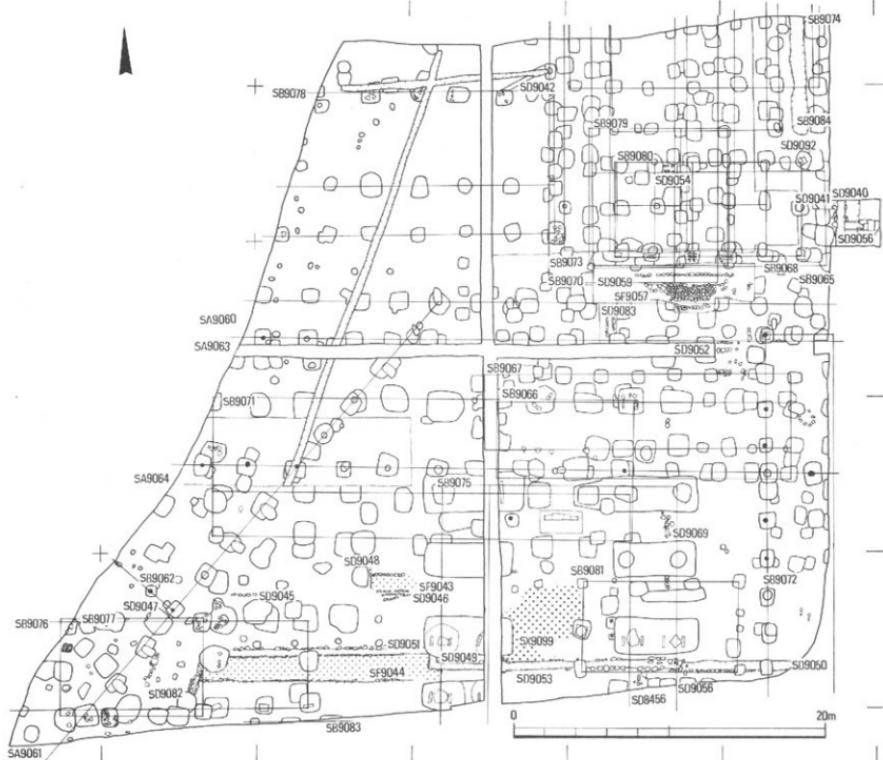
SD9052は東西方向の石組溝で西端で北に折れる。溝幅0.5m、深さ0.2mである。調査区の中央東寄りで検出した。SA9063の柱掘形に切られる。

SD9045は調査区の西南で検出した東西方向の石組溝で、南の側石が一段残る他は後の造替によって、大きく破壊をうける。東西の延長は不明である。

SB9065は5間×2間、10尺等間の東西棟建物で、大垣に接して建つ。

SB9066は7間×2間の東西棟建物で、SB9065の南30尺(9m)にあり、南北側柱はF期のSA9064と重複する。

B期 池SG5900-Aの開鑿に伴って、調査区中央に東西掘立柱塀SA9063を設け、庭園地城の北限を定める。池の北岸にあたる調査区の南半部では石組溝を屈曲させ、第99次の調査で検出した導水路SD8456と連結させる。



第1図 第110次発掘追跡図

SA 9063 は調査区中央で検出した東西12間、10尺等間の掘立柱塀で、東から10間目のみ7尺と狭い。西はさらに調査区外に続き、東も大垣との関連は不明である。東院南面大垣中心線の北 100.5 m に位置する。

SD 9046 は調査区の西南部で検出した東西方向の石組溝で、A期の SD 9045 とほぼ同じ位置に造替えたものである。西端では西南方向に折れて斜行溝 SD 9047 となり、東端では南北溝 SD 9048 にとりつく。SD 9048 の北の延長は不明。

SD 9049 は南端が SD 9050 に直交してとりつく南北方向の石組溝で調査区の南中央で検出。北端は SD 9046 にとりつく可能性が大きい。

SD 9050 は SD 9049 の南端から東に延びる東西方向の石組溝。調査区南辺の東側で検出。旧池 SG - 5800 A の導水路 SD 8456 の北端が直交してとりつく。

SF 9043 は幅員 12 m の小石敷路で SD 9046 を南側溝とする。SD 9048 の東に接して長さ 2.5 m 程残る。東の延長部分は破壊をうけ不明。

SX 9099 は SD 9050 の北辺に分布する小石敷面。SF 9043 の石敷ほどまとまっていないが、破壊が著しく正確な広がりは不明。

SB 9067 は 8 間 × 2 間、8 尺等間の東西棟建物である。東西塀の南で検出。

SB 9068 は 5 間 × 2 間の東西棟建物で、A期の SB 9065 とほぼ同位置に重複する。各柱の底に礎板を敷いたり、杭を転用した角材を井桁に組む。

C期 調査区を南北に区画する東西塀 SA 9060 に、斜行する塀 SA 9061 がとりつく。斜行塀の設置に伴い、前期の溝や石敷は東南方向に移動する。また、東西塀の北では東西棟にかわって大規模な南北棟 SB 9070 が建つ。

SA 9060 は B期の SA 9063 から 3.0 m 北によったところに東西塀を造替える。10 尺等間で 13 間分検出した。南面大垣中心線の北 103.5 m に位置する。

SA 9061 は西南方向に斜行する掘立柱塀。東北端で SA 9060 にとりつく。10 尺等間で 12 間分検出した。丘陵に平行し、さらに南に延びる。

SD 9051 は東西方向の石組溝。調査区の南西で検出。B期の SD 9046 を 3.6 m 南に移して造替える。東は SD 9049 にとりつく。

SD 9082 は SD 9051 の西端に斜行してとりつく石組溝。B期の SD 9047 を 3.6 m

東に移動したもの。

SF9045 は東西方向の石敷路で、SD9051 を北側溝とする。幅員 1.2 m。

SB9062 は斜行塀 SA9061 の東北端から 9 間目の柱の西に直交してとりつく塀で、中央に柱間 9 尺の門を開く。SA9061 とのとりつきは添柱を用いる。

SB9070 は SA9060 の北、1.5 m の位置にある 6 間以上 × 4 間、9 尺等間の東・西庇付南北棟で、調査区の北に続く。

D 期 斜行する塀 SA9061 をとりはらい、東西塀 SA9060 の南に大規模な東西棟 SB9071 を建て、東脇に狭長な南北棟 SB9079 を配す。

SD9053 は調査区の南辺で検出した東西方向の石組溝。SD9050 を造替えたもので、SB9072 の手前で南に曲る。

SD9056 は SD9053 の東端から南に延びる池 SG5900 - A の導水路である。

SD9069 は南北方向の石組溝。SB9071 と SB9072 の間を南北に走り、南端で SD9051 にとりつく。底石のみ残存。

SB9071 は東西塀の南にある 9 間 × 3 間、10 尺等間の南北庇付礎石建東西棟建物である。

SB9072 は SB9071 の東に並ぶ 9 間以上 × 2 間の南北棟建物である。西側の柱筋には、柱根を残すものが多い。

SB9073 は東西塀の北側にある 5 間以上 × 4 間の南北棟建物で北は調査区外に続く。柱間寸法は身舎 10 尺等間、庇の出 9 尺である。

E 期 調査区の南で新池 SG5800 - B の造営に伴い、東西塀をとりはらい園池の北側を広く活用する。全域を整地嵩上げし、東西大垣西雨落溝を造替え、暗渠も木樋から凝灰岩製に改造する。

SD9056 - B は東面大垣木樋暗渠を廃して、その上に凝灰岩製切石でつくる。底石のみ残存し、側石は抜き取られている。

SF9057 は幅員 1.2 m の東西方向の石敷路で、調査区の中央東寄りで検出。径 20 cm 程の河原石を敷き、路面の南には 0.3 m 低い石敷テラス、北には側溝がある。東西約 6.5 m の範囲が破壊をうけずに残る。

SD 9054 は調査区の東北部で長さ 1.0 m 程検出した東西方向の石組溝である。溝幅 0.3 m で、底石と側石 1 段が残る。SB 9074 の側溝と考えられる。

SB 9074 は調査区の東北端で検出した 6 間 × 4 間の隅欠き 4 面庇付建物。

SB 9076 は 6 間以上 × 2 間の東西棟建物で、調査区の西に続く。

SB 9075 は桁行 3 間以上、梁行 5 間の二面庇付南北棟建物で、柱間寸法は桁行両端間 12 尺、中間 17 尺、梁行 10 尺等間である。柱掘形は側柱と入側柱を一連とし、すべて柱抜取痕跡がある。桁行 3 間であるが、さらに 1 間南に延びる可能性もある。掘形の深さは約 1.7 m である。南 2 列の掘形には、径 1 m ほどの礎石を据え、石の上面には径 40 cm ほどの八角柱の当り痕跡が残る。池の西岸の大型柱掘形（第 99 次）、八角棟建物 SB 5880（第 44 次）にも、同類の基礎工事がみられる。

F 期 再び東西擣を設けて、庭園地域とその北接地域とを区画し、調査区の西北に大規模な建物 SB 9078 を建てる。

SA 9064 はこの地区を南北に区画する東西方向の掘立柱擣。10 尺等間で 13 間分検出した。南面大垣から北へ 93 m（310 尺）の距離にある。

SB 9078 調査区の西北で検出した 6 間以上 × 3 間の南庇付東西棟礎石建物で西は調査区外に延びる。

SB 9079 は 3 間 × 3 間の東庇付南北棟建物。調査区の東北で検出。南の柱掘形が E 期の石敷路 SF 9057 を部分的に破壊する。

SB 9077 は調査区の南西で検出した 3 間 × 2 間の東西棟礎石建物。礎石掘付痕には小礎が、ぎっしりとつまる。

SB 9081 は調査区の東南で検出した 3 間 × 2 間の東西棟礎石建物。西妻柱には円形の柱座をもつ凝灰岩製礎石が残る。

G 期 F 期の SB 4079 の位置に、4 間 × 2 間の縦柱建物 SB 9080 を建てる。

遺 物

木簡の出土総数は 60 点であり、そのうち屑片が 33 点を占める。一期以前の SK 9060 から 21 点、SD 9041 から 8 点、D 期の SD 9062 から 16 点の出土をみた。比較的古い時期の遺構に伴うものが多い。しかし、全体的には習書を示したもののが多

く、年記を記載したものはない。

SK9060 から出土した里多を列記したもの。

(表) 「□□里 青見里 前里 石寸里」

(裏) 「〔知カ〕 □□里 □部里 □□部里」

A期のSB9065 の柱掘形埋土から出土した貢進付札。

「三方郡乃止三家人羽志米六斗」

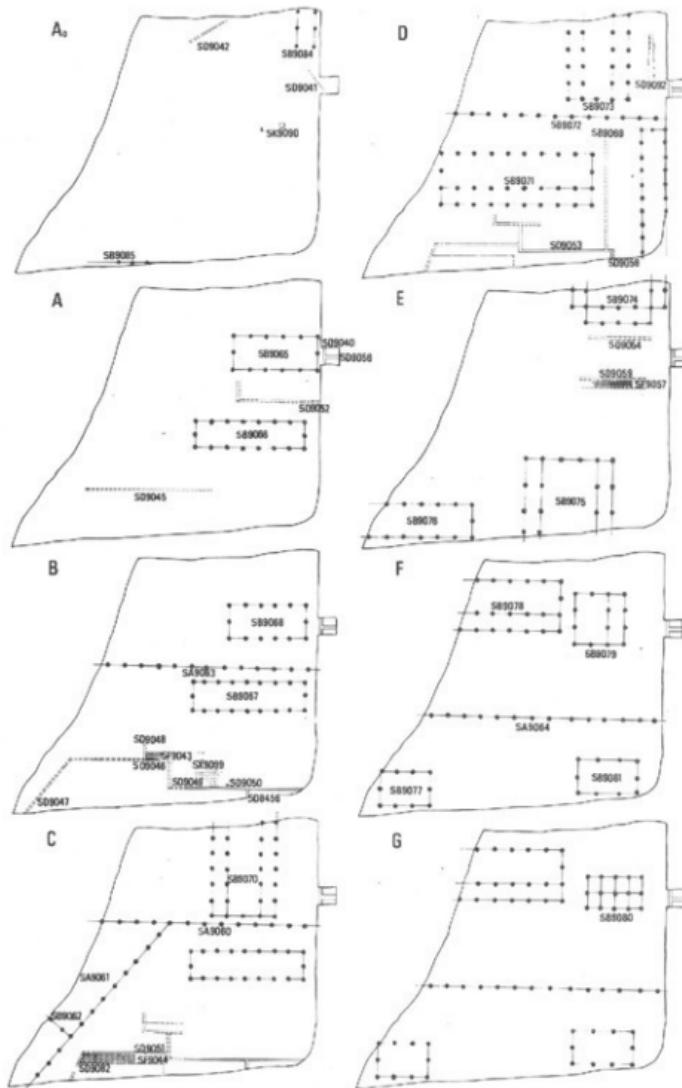
土器類は須恵器・土師器が平箱で約40箱出土した。主として整地土層中からの出土であるが、遺構に伴って出土したものもある。また、古墳時代の須恵器・土師器も整地土中から出土し、とりわけ調査区西北部で顕著であった。東面大垣木樋内からは、平城宮Ⅰ・Ⅱ期の須恵器蓋A・杯Aが、A期以前のSD9041 からはⅠ・Ⅱ期の土師器椀・須恵器蓋Aが出土した。E期以降の石敷路SF9057 の上面から出土した土器は、平城宮V～Ⅷ期に該当するものが多い。特異な土器として上層の整地上から出土した水鳥形硯、中層の整地土から出土した越州産青磁壺がある。また、調査区東北隅の下層の整地上から製塙土器が出上。

瓦埠類は多量に出土した。軒瓦は軒丸瓦 259 点、軒平瓦は 282 点ある。特殊なものとして、綠釉埠 2 点、二彩釉平瓦片が 1 点ある。

軒瓦のうち最も多いものは、第Ⅲ期に属するもので、軒丸瓦 5型式 101 点、軒平瓦 5型式 116 点がある。そのうち 6282 型式 81 点、6721 型式 100 点で最も多い。ほとんどが最上層の整地土・灰色バラス土中から出土しており、何点かはその下層の黄褐色粘質土中から出土している。第Ⅱ期に属するものは、軒丸瓦 80 点、軒平瓦 103 点がある。主要なものは、軒丸瓦 6135・6308・6314 型式、軒平瓦 6663・6664・6681 型式である。第Ⅰ期と第Ⅳ期のものは少星である。

まとめ

今回の調査で、下層の整地土から平城宮Ⅰ・Ⅱ期の土器類が多く出土したことにより、平城宮東院地区の整備がすでに奈良時代の前半に終了していたことが明らかとなった。また、東西方向の掘立柱跡を検出したことにより、東院庭園の北隅を知ることができた。今回の調査区の特色は、建物の重複状況が著しい点にあ



第2図 第110次地図変換図

り、小期区分では少なくとも 7 期以上にわたる変遷を示す。淡褐色砂質土を主体とする下層の整地は、池 SG 5800 - A の開鑿以前になされている点は注目されてよい。この整地は、東院東面大垣を造営する事業と軌を一にするものである。この時期（A 期）以前にさかのぼる遺構も存在することを部分的に確認したが、詳細は不明である。

池の開鑿は築地塀設置後（B 期）におこなわれ、北を掘立柱塀で限る。この旧池 SG 5800 - A の段階では、最初の庭園の南北長は、大垣中軸線を基準として北 100.5 m の範囲、ついで北 103.5 m の範囲であることが確定できた。池の北辺には東西棟が建つが、建物と池との間には屈曲した石敷路、石組溝を配して、大きく空間をとる。この石敷路、石組溝はその後の造替えや破壊のために正確な復原は出来ないが、道路に関しては池北岸を巡る遊走道としての性格、また溝に関しては池への導水路としての機能をもっていたことは疑いない。

E 期には黄褐色粘質土を主体とする整地を行い、新池 SG 5800 - B の造成と池北辺の整備を行う。この整地土に含まれる遺物によって天平勝宝年間に実施されたとみられる。池の改造と同時に、従来庭園の北を限っていた東西塀はとり払い、庭園地域を拡大する。新池の北辺には大規模な南北棟 SB 9075 が建ち、さらにその北側では石敷の東西路 SF 9057 を設ける。

F 期では、再び東西塀 SA 9064 を設けて庭園地域を縮少し、庭園に北接する地区に大きな礎石建物 SB 9078 を建てるなど、庭園とは別個な性格をもつ地区的造営を始める。また、礎石建物が多い点も、この F 期の特徴としてあげられる。

以上が調査区の遺構の変遷の概略である。出土遺物の最終的な整理が完了していないために、各期の年代推定は未確定であるが、現状では A 期以前を木簡にみられる記載法から和同元年頃に、B 期を旧池が開設される養老年間以前に、E 期を天平勝宝年間以降と考えられる。

II 第1次朝堂院地区の調査（第111次）

調査地は昨年度の第102次調査地の南に続き、東第2堂の基壇と目される土壌が南北に延びている。また調査地は推定第2次朝堂院の西門推定地の西方にあたり、二つの朝常院に挟まれる地域の性格を捉える上で恰好の地点にあたる。調査は昨年度の第102次調査で一部検出された東第2堂の規模の確認と、両朝堂院間の通路等の有無の確認を目的におこなった。昭和53年4月3日に開始し、7月15日に終了した。調査面積は3,300 m²である。

遺構

発掘区の旧地形は推定第1次内裏地域から南に延びる小支丘の東南部のなだらかな傾斜面にあたる。この谷筋の堆積土が宮造営時の地山面である。宮の造営に際し整地を行い傾斜面を平坦に造成している。整地は大きく5時期に分かれる。

第1次整地はバラス混りの灰白色粘土を主体とする整地土で、東第2堂SB8550の東に広がりを持つ。発掘区の東端では、この整地土は第2次朝堂院地区の整地土の上にのっている。第2次整地は主として暗灰色粘土が使われ、全面一様に敷かずに、第1次整地の窪みを埋めるようなかたちで、整地されている。第3次整地はSB8550とSA5550の間に見られる局地的な整地で、黄褐粘土・黄灰砂質土が使われている。第4次整地も局地的であり、黄褐砂質土・灰褐砂質土が使われ、第1次整地の溝状の窪みSX8956を埋めている。第5次整地は朝堂院廃絶後の整地である。SB8550とSA5550の両基壇に挟まれる窪みには、瓦を多量に含む灰褐砂質土で、朝堂院の東にはバラスを含む暗灰粘土で整地を行っている。

A期 第1次整地以前の時期にあたる。SD9020は発掘区西辺部中央にあり、幅0.8m、深さ0.5mの素掘りの東西溝で、造営時の区画溝の可能性がある。第97次調査でも同様な溝が検出されている。この他、発掘区南西部に古墳時代の遺物を含む小ピット群があるが、遺構としてまとまりがない。

B期 第1次整地後から第2次整地以前の時期にあたる。SD3765は南北塀SA5550の西約4mの位置にある素掘りの南北溝で、幅約2.5m、深さ0.8m。

2層の堆積が認められたが、埴輪片が少量出土したにすぎない。

SA 8410 は、SD 3765 の東約 17.5 m に位置する掘立柱の南北塀である。掘形は一様でなく、一辺 1.8 ~ 1.1 m の矩形で、約 3 m 間隔に掘られている。4ヶ所断ち割りをおこなったが、柱痕跡は検出できなかった。SA 8410 は第1次朝堂院の中軸線より東へ約 120 m 離れた位置にある。

SX 8559 は SA 5550 の基壇下を南北方向に延びる土壙状遺構である。幅約 1.8 m 高さ約 0.3 m 程の土盛を小礫混りの黄褐色上で築いている。この位置は次期の SA 5550 の位置に相当する。第2次整地は SX 8559 の全体を被うことなく、頂上に高さを揃えている。この事実から SX 8559 は SA 5550 の掘形を揃えるための目標として作られた可能性が強い。

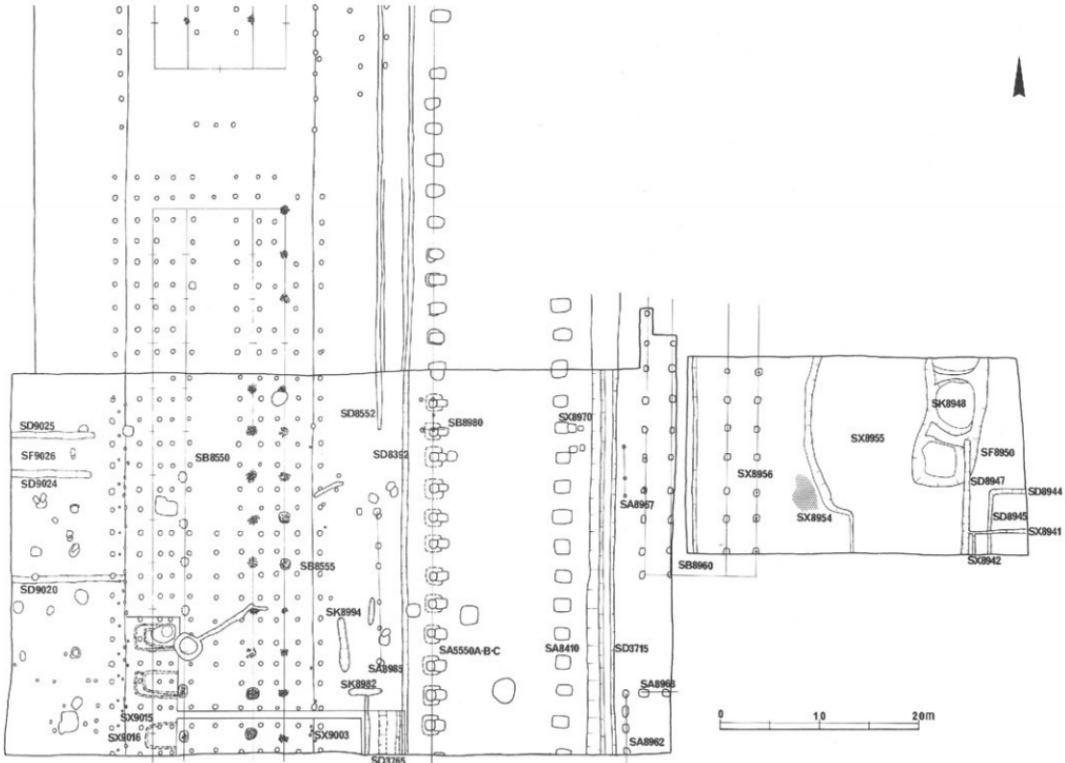
SX 8956 は SD 3765 の東約 35 m に位置する幅 11.0 m、深さ約 0.4 m の溝状の窪みである。第4次整地に際して埋められる。

SD 8944 は発掘区東辺に推定第2次朝堂院地区から西流する東西溝で、南に折れて SD 8945 となる。素掘りの溝で幅 0.5 m・深さ 0.6 m。

C期 第2次整地から第3次整地以前の時期である。

SA 5550 - A は、推定第1次朝堂院の東を画す南北塀である。掘形は長辺約 2 m ほどの矩形で柱間は 10 尺等間である。今回調査した SA 5550 は保存状態は極めて良好で、3ヶ所断ち割りを行い、SA 5550 の変遷に関する貴重な資料を得た。SA 5550 - A は柱を建てたのち、幅約 6 m の基壇を構築している。柱抜取り穴はこの基壇面から掘り込んでいる。SA 5550 - B は SA 5550 - A の抜取穴の埋土を切り、その上層に築地本体と考えられる盛土 SA 5550 - C を検出した。従って SA 5550 は、塀 A → 塀 B → 築地 C と変遷する事が明らかになった。

SD 3715 は第1次朝堂院と第2次朝堂院の間を流れる南北の基幹排水路で、幅 2 ~ 3 m・深さ 1 m である。2回の改修の跡があり、上層・中層・下層溝の3時期に分かれる。下層溝から木簡が出土し、中層溝から神亀 5 年の木簡が出土した。第102次調査では、この層位から天平 5 年の木簡が出土しており、また第97次調査で下層溝から神亀～天平初年の紀年のある木簡が出土している事から、第1回



第3図 第111次調査追跡図

めの改修の時期は天平初年頃と考えられよう。上層溝は調査区を貫通せず途中でとぎれ、遺物は少ない。平安時代初頭まで存続する。

SF 8950、SD 8947 は第91次調査で検出した内裏外郭の南門 SB 8160 に通ずる道路 SF 8950 と、その西側側溝 SD 8947 である。SD 8947 は南北の表掘り溝で、幅 0.9 m、深さ約 0.6 m。この溝の掘込み面は第1次整地であるが、門 SB 8160 の開く築地壠 SA 8170 ができるのは天平年間であるので C 期に考えている。

SX 8941・8942 は SF 8950 の路面上で第2次朝堂院の方から西に流れ込む暗渠 SX 8941 と、南に折れる暗渠 SX 8942 である。瓦・礫が多量に詰っていた。

D 期 第3次整地以後、第4整地前の時期にあたる。

SD 8550 は推定第1次朝堂院の東第2堂である。今回の調査で桁行 8 間分を検出したが、更に南に延び第102次調査分と合わせて梁間 4 間、桁行 12 間以上の規模となる事が明らかになった。SB 8550 は東西幅 28 m、残存高 0.6 m の基壇の上に立つ礎石建ち東西両庇付南北棟である。今回の調査では第2堂の柱間、礎石据付法に関する良好な資料を得た。根固め石の配列から柱間を復原すれば、桁行 14.5 尺等間、梁間 11.5 尺である。礎石据付手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状に掘込み、川原石を詰める。その上に礎石を置き割石を周囲に詰め、版築を礎石の頂上近くまで積み上げる工法を取っている。

SB 8550 の掘込地業には東西・南北の布掘りと柱 2 本分をカバーする坪掘りが見られる。南北方向の二本の布掘りの間に東西方向の布掘りが約 2 m 間隔に掘られている。坪掘りは東西方向の布掘りの間に配されている。二つの地業の前後関係は布掘りが先で、坪掘りが後という結果を得た。南北の布掘りは幅約 1.0 m、深さ 0.5 m、東西の布掘りは幅 2.8 m、深さ 0.4 m である。坪掘りの東西長さは確認しなかったが、南北幅は 2 ~ 2.3 m である。坪掘地業の間隔は 16 尺であるが、基壇上の根固め石から復原される桁行（14.5 尺）とは一致しない。そのため基壇が 2 時期に分かれる可能性もあるが、工事途中の計画変更と考えられる。両地業とも第3次整地を切って、粘土と砂質土で版築状につき固めている。

SB 8555 は SB 8550 の建設の際の足場である。柱の四隅と軒先、棟通りに径約

50cm程の穴を配している。軒先の足場には抜取穴が見られるが、基壇上の穴には抜取穴はない。棟通りの足場穴は発掘区の南半部のみに認められる。

SX9003・9015はSB8550の掘込地業の東・西肩の近辺に、南北方向に千鳥状に配された杭列で、西側SX9015は残りはよいが、東側SX9003は数ヶ所しか検出していない。基壇版築の樋板止めと考えられる。

SX9016は基壇の掘込地業の西肩から約0.8m離れた位置にある南北方向の杭跡列である。8尺間隔で配されている。やはりSB8550の建設に関係すると考えられるが、掘込地業の東肩には検出されなかった。

SX9001・9002は掘込地業の東肩に沿う南北方向の2本の溝状遺構で、地覆掘付跡SX9001・同抜取跡SX9002と考えられるが、西側では検出されなかった。

SD9024・9025、SF9026、SD9024・9025は第2堂の西側にある素掘りの東西溝で、SB8550の基壇の西3mの位置からはじまり、西に向って流れる。2本の溝は柱筋に合っていて、両溝間は東第2堂への通路SF9026とも考えられる。両溝とも埋土に多量の瓦を含んでいた。

SA5550はB期以降2回改修されている。Aの柱を抜取り、ほぼ同位置に掘立柱Bが作られ、更にBを抜取り、築地Cを作る。Bは一辺約1m、深さ約0.6m程の掘形をもち、10尺等間であるが、Aより規模は小さい。

SB8980は推定第1次朝堂院の南北2等分線より、やや北に位置する間口12尺の門である。位置関係からSA5550-Cを開く、くぐり門と考えられる。

SD8392はSA5550の西側雨落溝で、第3次整地面にあり、幅0.5mである。

SD8552はSD8392の西3mにある幅0.5mの南北溝で、残りが悪い。

SA8985はSD8552の西2.4mにある南北方向の掘立柱跡で5間分検出した。柱間寸法は不揃いである。第102次調査のSA8553と柱筋が通る。

SX8970はSD3715の西岸にある4個の掘立柱で、南西の掘形に柱根が残る。柱根は松材の角柱で東に傾いて立っていた。SD3715に架る橋とも考えられるが東岸に見合う柱穴はない。

SA8962・8963はSD3715の東岸にある掘立柱跡である。SA8962は柱間6尺

等間の南北塀で3間分検出した。SA8963はSA8962の東2mの位置からはじまる東西塀で、一間分(7尺)を検出した。

E期 第4整地以降廃絶までの時期である。

SB8960は桁行8間以上、梁行4間、10尺等間の二面庇付南北棟建物で、更に北に延びる。柱撫形は小さく、長方形のものと円形のものがある。径15cm程の広葉樹の黒木の柱根が5ヶ所に残っていた。

SA8967はSD3715とSB8960との間にある掘立柱塀で2間分検出した。柱間は7尺、10尺でSB8960と関係する遺構としてE期に入れた。

SX8954はSB8960の東6mにある凝灰岩片の堆積である。

SK8948は発掘区東北隅にある土壙でSF8950を切っていて、宮の廃絶に近い時期のものである。下層から平城宮V期の土器と木簡1点が出土した。

F期 朝堂院廃絶から第5次整地が行われるまでの時期にあたる。東第2堂とSA5550の空間地は鍛冶工房となり大小さまざまなピットが掘られる。

G期 鍛冶工房の廃絶後、SA5550と東第2堂間の窪みは大量の瓦を埋めて平坦に造成され、朝堂東側ではバラス混りの暗灰粘土で奈良時代の遺構を完全に埋めつくしてしまう。第5次整地は平安時代末に行われたものと考えられる。

遺物

木簡 総数24点出土した。SK8948から1点出土した他は、全てSD3715からの出土である。そのうち主要なものを次にあげる。

(表) □進上女瓦三百□ □丁冊五人

(裏) 神龜五年十月□ □秦小酒得麻呂

(表) 遠江国敷智郡□呼嶋

□□三百卅二大伴部山崎九十

(裏) □□□六十一□ 物部黒人七十 (表裏天地逆)

瓦塙類 今回出土の瓦塙類の内訳は、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、刻印瓦、塙である。軒瓦は総数1,048点(軒丸瓦411点・軒平瓦637点)、丸・平瓦はセメント袋にして500袋ほど出土した。

瓦塊類の大半は SA 5550 と SB 8550 の空間地を埋める瓦層から出土した。このうち大半を占める型式は軒丸瓦6313、軒平瓦6685である。次に瓦層出土軒瓦を時期別に見た場合、藤原宮式を含むⅠ期の軒瓦は20%、Ⅱ期の軒瓦は74%、Ⅲ期以降の軒瓦は6%となり、Ⅱ期の瓦が圧倒的多数を占める。SA 5550 A の抜取穴から藤原宮式軒瓦が出土しており、SA 5550 に先立つ建物がないので、SA 5550 A には藤原宮式軒瓦が葺かれていたと考えられよう。

上器・土製品　　上器の量は少ない。SA 5550 の西ではほとんど出土せず、上器の大半は朝堂院の東外郭部の SD 3715・8944・8945、SK 8948 から出土した。SD 3715 出土器は平城宮Ⅱ期から平安時代初期に編年される。また SD 3715 からは判読できないが墨書き器が数点出土した。瓦層には土器は少ないが、平城宮Ⅳ～V期の土師器・瓦器が出土している。SB 8960 の柱抜取穴からは蹄脚硯の破片が出土した。土製品には土錘があり、SD 3715 から出土した。

木製品　　木製品は SD 3715、SK 8948 から出土した。SD 3715 からは杓子1点、箸3点、加工竹材1点、加工木片400点程出土した。SK 8948 からは杭材1点が出土している。

金属製品は非常に少なく、銅鈴1点、銅釘1点、鉄釘1点、帶金具1点が出土したにすぎない。帶金具は SD 3715 から出土した。

その他の遺物　　朝堂院廃絶後、SA 5550 の西側の一部が鍛冶工房となったが、それに関連する多数の鉄滓、ふいごの羽口が出土している。その他、出土層位は不明であるが、珊瑚玉1点がある。

まとめ

今回の調査の結査、東第2堂の規模は把握できなかったが、発掘区の中央の土壇はさらに南に延びており、第1次朝堂院の南北長が第2次朝堂院の大極殿前の回廊から十二堂院南門（平安宮の会昌門にあたる）までの距離と同じならば、第1次朝堂院の朝堂配置は、第2次のそれと異なり、東西に各2棟の南北棟が配置されている可能性が強くなったと言えよう。

III 大極殿跡の調査（第113次調査）

この調査は、俗に「大黒の芝」と称され、平城宮大極殿跡とされている土壇を中心に $2,100\text{ m}^2$ についておこなった。調査地は宮南面東門（壬生門）の北方約580mにある。この土壇は昭和30年に実施された平城宮第1次調査によって、桁行柱間寸法13尺の複廊で閉まれていることが明らかにされている。また、地形の状態から南面回廊の中央には大極殿門、北面回廊中央には後殿の存在が推定されている。上壇は東西49m、南北26mの長方形で、南に緩やかに傾斜する周囲の現地表からの比高は南側2.3m、北側1.5mであった。調査は昭和53年10月1日 начиная с, 昭和54年2月7日に終了した。

検出した奈良時代の遺構は上層と下層遺構にわかれれる。上層遺構には基壇建物SB9150（第二次大極殿）と、それに関連する足場SX9146・9147・9148・9149、石敷SX9145-A・Bなどがあり、下層遺構には掘立柱建物SB9140・9141、及び柱穴列SA9142がある。奈良時代前の遺構には前方後円墳（神明野古墳）SX0249があり、平安時代の遺構には9世紀の掘立柱建物SB9152、10世紀の土壇SK9153がある。

大極殿

SB9150は基壇上に建つ桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟の礎石建物で、柱間寸法は身舎15尺等間、庇の出12尺、基壇の出13尺である。基壇の残存状態は良好で、礎石は残存しないが、その据付位置を全て確認することができた。

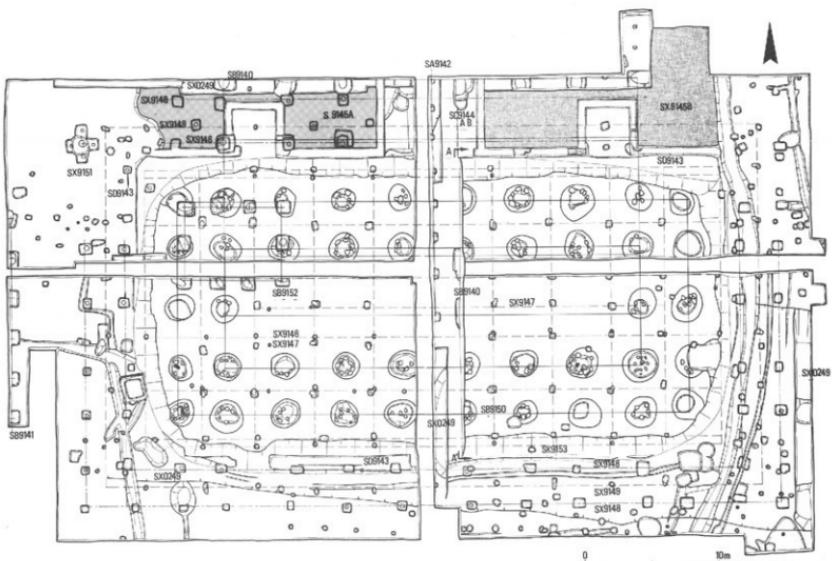
軒廊・階段 地覆石抜取痕跡の状況により、基壇北面の中央間から東西それぞれ3間目の位置に幅4.45m(15尺)、出3.55m(12尺)の階段が取り付き、北面中央には後殿に接続する東西幅8.15m(27.5尺)の軒廊SC9144を検出した。軒廊基壇には大極殿基壇北端から北約3.3m(11尺)に、梁行柱間寸法4.5m(15尺)の一対の礎石抜取痕跡がある。この軒廊には基壇幅3.8mの前身軒廊SC9144-Aがある。基壇南面では中央間と北面階段と対応する位置に、階段裏込めの積土を残しているが、東階段はほとんど削平されている。東・西面の階段については、

後世の削平を受けて痕跡を残さないけれども後述する建築工事足場 SX 9148 の柱間寸法が階段部分に限って広くなっている状況から判断して、それぞれ南から 2 間目の位置に階段を設けていたと考えられる。

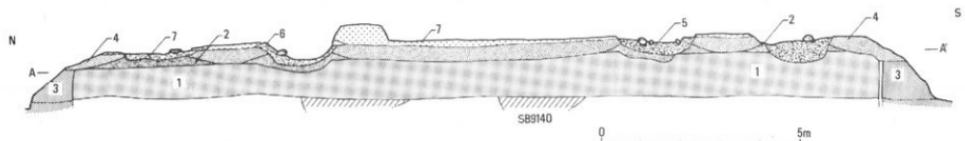
地覆石 北面東階段の西入隅部分には、基壇化粧の凝灰岩製地覆石が東西方向に 2 個相接して原位置に残存していた。2 個とも遺存状態は良好である。西側の地覆石は幅 45.0 cm、長さ 56.4 cm、高さ 32.0 cm、外端から内側 28.9 cm の位置に幅 10.6 cm、深さ 6.8 cm の溝を穿ち羽目石を受ける仕口としている。また、上面には、外端から 19.5 cm の位置に羽目石前面の当たり痕跡が認められる。見付上方には幅 3.8 cm、高さ 6.0 cm の段が切り欠かれている。東側の地覆石は北面東階に接する位置にある。幅 45.0 cm、長さ 79.9 cm、高さ 30.0 cm で、上面の西半部分には外端から内側 18.4 cm の位置に見込み 23.2 cm、見付幅 38.7 cm、深さ 7.2 cm の束石を受ける納穴がある。納穴の外端から 7.0 cm のところに納穴と同幅の束石の当たりがある。上面東半部分には外端から 27.6 cm の位置に幅 13.3 cm、長さ 41.2 cm、深さ 7.8 cm の羽目石を受ける溝状仕口があり、西端から 49.6 cm には階段の羽目石を受ける幅 14.4 cm、長さ 14.0 cm、深さ 4.8 cm の南北方向の溝状仕口が穿たれている。見付上方には幅 3.0 cm、高さ 5.0 cm の段を切り欠いているが、風蝕によって著しく磨耗している。

石敷 基壇周辺には前後二時期にわたって石敷を敷設している。基壇北側東半部では小石敷 SX 9145 - B を検出した。直径 5 ~ 15 cm の礫を敷き詰め、直上には大極殿を解体した際に廃棄された瓦片、凝灰岩切石片が多量に堆積していた。

小石敷の下層には厚さ 10 cm 程の砂質土層を挟んで砂利敷 SX 9145 - A がある。基壇北側西半部では上層の小石敷は後世の削平を受けて、下層の砂利敷のみ残存していた。これは直径 1 cm 前後の小礫を 5 ~ 10 cm 厚に敷き詰めたもので、その下に凝灰岩の細粉を多く混じえた厚さ 5 ~ 10 cm の砂質土層がある。下層砂利敷面から地覆石上面までの見付高さが 20 cm であるのに対し、上層石敷面は地覆石上面とほぼ同じ高さであり、上層石敷はのちに嵩上げされたことは明らかである。なお基壇東・西・南側では後世の削平により石敷は残っていない。



第4図 第113次調査遺構図



第5図 SD9150基壇断面図

基壇の築成 基壇中央を南北に断ち割った結果、以下のような基壇築成工程を明らかにすることができた(第5図)。

(1) 基壇版築を南北20.5m、東西約41.9mの範囲について築成する。下層整地面は南に緩やかに傾斜するために高さは北で75cm、南で120cmを測る。版築層は2~10cmの厚さで15~16層積み上げている。積土には下半部に小礫を多く含む暗褐色粘質土を多用して、上半部には明黄褐色粘質土を用いている。

(2) 上壇①の上面の礎石据付位置に、基底部での直径2.7~3.2m、高さ0.50~0.55mの円丘形の盛土を行う。この部分には土壇①の上半部と同質の明黄褐色粘質土を用いているが、より固く締っている。円丘の基底部に厚さ2~5cmの固く締った層を凸レンズ状に2~3層積上げた後、厚く粘質土を盛るもの(北側柱位置)と、土壇①の上面を30cm程楕底状に掘り下げてから粘質土を埋めて円丘を形成するもの(入側柱位置)とがある。この相違は礎石抜取痕跡から推測される礎石の厚さに対応しており、礎石据付のための仕事の差をあらわしている。

(3) 土壇④の四周を全面的に30cm程地下げを行い、基壇を拡幅する。その幅は南側1.25~1.40m、北側1.05m、西側1.42mで東側は未確認である。この部分の版築層は厚さ3~20cmの粘土あるいは砂質土で、小礫や凝灰岩細片を多く含み、極めて固く締っている。南側では①と③の間には縦方向に幅9cmの非常に脆い土層が認められるが、性格については不明である。なお軒廊の前身基壇SC9144-Aはこの拡幅と一体となって築成され、厚さ5~10cmの固く締った層を積上げている。いっぽう、軒廊基壇拡幅部分の積土には凝灰岩片や瓦片が混入しており土質も柔らかい。

(4) 上壇①の上面に足場SX9146を組む。そのうちに、土壇④、③および円丘形盛土②の上全面にわたって版築を重ねる。版築層は5~6層あり、全体で35~38cmの厚さである。小礫を多く含み全般的に固く締っている。

(5) 最上層には厚さ5cm前後の暗黄白色砂質土を全面に均一に敷き詰め、この段階で礎石据付の掘形を掘削する。掘形は④の積土と②の円丘形盛土部分を楕底状に掘りくぼめており、その深さは礎石の厚さに対応していると考えられる。掘

形内には固く締った黄灰色の粘質土と礎石の根固め石があり、根固め石には直径20～80cmの河原石が使用される。また礎石据付痕の底面に直径5cm前後的小石を敷いている箇所もある。

(6) 磚石を設置した後、磚石の周囲に淡黄褐色粘土の根巻土を盛り上げ礎石の安定をはかる。

(7) 更に全面にわたって版築による積み上げを行い、土壌部分の築成を完了する。なお残存していた基壇の高さは地覆石上面から1.3～1.5mである。

(8) 階段裏込の積土を行う。厚さ7～20cmの版築層であるが基壇本体よりも粗雑である。

足場 大極殿の造営・解体に伴う4種類の足場柱穴を検出した(第6図)。

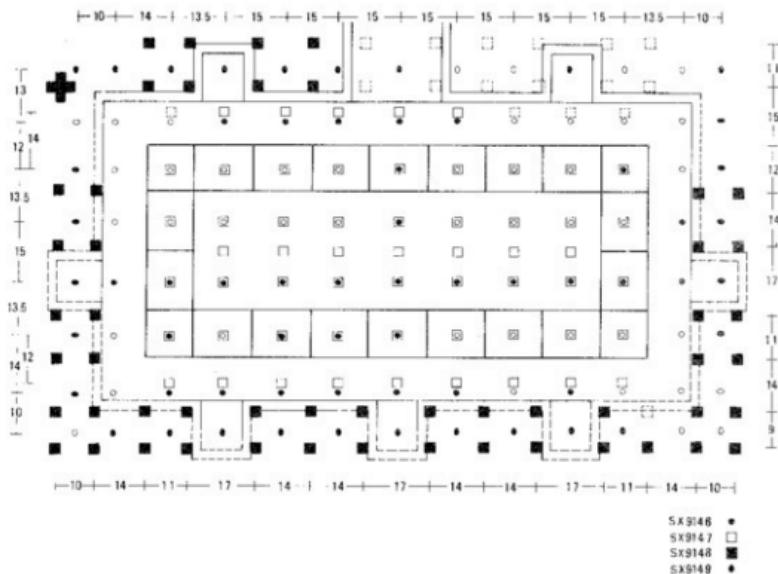
SX9146はSB9150の造営に伴う基壇上の足場である。柱位置はSB9150の各柱間中央通りにある。柱穴は直径25～30cmの円形を呈し、柱掘形をもたない。

SX9147はSB9150の解体に伴う基壇上の足場である。柱位置はSX9146と同様SB9150の柱間中央通りにあるが、身舎の内側部分の棟通りにも配される。柱掘形は一辺40～60cmの方形で柱抜取痕跡がみとめられ、埋土中には凝灰岩切石片や瓦片が混入している。SX9146・9147はほぼ同位置に柱穴が重複しているが、基壇上の南辺と北辺ではSX9146はSX9147より南に2尺ずれている。また基壇東辺と西辺にSX9147の柱穴はみとめられない。

SX9148はSB9150の造営に伴う足場で、基壇の四周を二重に囲むように柱を配している。内側の柱列とSB9150の側柱までの間隔は北側で15尺、南・東・西側で14尺である。また梁行柱間寸法は北側で11尺、南・東・西側で10尺である。梁行の柱筋はSB9150の柱筋とほぼ一致するが、北面、南面の階段部分では桁行柱間寸法が17尺と広い。東面、西面についてもSB9150の南から2間目の柱間位置の足場柱穴の柱間寸法が17尺であり、すでに触れたように、この位置に階段を設けていたと考えられる。この足場柱穴は一辺60～90cmの方形掘形をもち、直径20～30cmの柱痕跡が残るが、ごく浅い。北西隅の4間分の柱穴がなく、北東隅部分も削平されてはいるが、はじめから足場を設けなかったものと推定される。

SX 9151 は基壇北西角から西に約 3.0 m の位置にあり、十字形の掘形をもつ。中央に直径 55 cm の柱抜取痕跡があり、四方に直径 25 cm 前後の柱痕跡がみとめられる。5 本の柱は埋土の状態からみて同時に設置されたものと考えられる。中央柱は足場 SX 9148 と柱筋を揃え、SX 9148 と密接な関連をもっていたと思われるがその実際の機能については不明である。

SX 9149 は SB 9150 の造営に伴う足場で、基壇四周を廻る。柱位置は SB 9150 の各柱間中央通りで、基壇端から約 1.5 m 離れている。柱穴は基壇北側では一辺 60~70 cm の方形掘形で、他は円形あるいは楕円形である。この足場は基壇上の足場 SX 9146 から北側で 13 尺、南・東・西側で 10 尺離れた位置にあり、両者は一体であったと考えられる。基壇周囲の足場 SX 9148・9149 の柱穴は共に砂利敷 SX 9145-A の下の凝灰岩細粉を混入した砂質土層の下層面において検出した。



第6図 SB 9150 足場配設模式図

下層遺構

下層遺構は神明野古墳の削平をおこなった平城宮造営創建期の盛土整地面上で検出した。古墳周濠の埋土整地層の厚さは場所によって異なり、堆積土を丁寧にさらえた部分では50cm前後であり、さらえ残した部分では10cmと薄い。削平面を含めて30～40cm厚の盛土をおこなっており、基壇直下部分では整地最上層に小礫層が部分的に認められる。

SB9140は桁行7間、梁行4間、15尺等間の東西棟建物である。平面形式は四面庇と推定され、北庇部分は基壇の北側で検出し、南庇は基壇中央の南北断ち割り箇所において確認した。東・西庇については中央棟通りが基壇直下にあるため確認していない。南北方向の中軸線は礎石建物SB9150と同一で、梁行の柱筋も一致しているが、建物位置はやや北にあり、SB9140の南面柱列はSB9150の中央南寄りの位置にある。柱掘形は一辺130～170cmで、柱抜取痕跡から直径60cm程の柱を用いていたと推測される。

SB9141は調査区の西端で検出した5間以上、10尺等間の南北方向の掘立柱列で、SB9140の西側柱筋から西に16.2mの位置にある。南北棟建物である可能性が強い。この近辺は後世の削平を受け地山面が露出しているため、整地層との関係は不明であるが、下層遺構としておく。

SA9142は基壇中央の断ち割り部分において検出した南北方向の柱穴列で、SB9140の中軸線上にある。7間分を検出し、更に北に延びる可能性もある。柱間寸法は南から10・10・9・7・8・8・7尺と不揃いである。南端の柱位置はSB9140の南側柱筋とはほぼ一致するが、他はSB9140との関連は認められない。

神明野古墳

神明野古墳SX0249についてはすでに、平城宮跡第3・6・12・73次調査ではその概形が明らかになっており、今回の調査では前方部の西南隅を確認した。大極殿基壇南側では前方部周濠外縁、東側では前方部前縁、西側では周濠の西側の外縁を検出し、軒廊下の断ち割り箇所では前方部西側縁を検出した。調査区東端で周濠部分を掘り下げたところ最深部でも50cmと浅く、葺石などの施設はみら

れない。周濠の堆積土は底面に10~15cmの厚さで残っており、基壇中央の断ち割り箇所では厚さ80~100cmの礫混り青灰粘土及び黑色腐植粘質土である。

今回の調査の成果と従来の知見とを考え合わせると、神明野古墳は後円部径64m、前方部幅68m、前方部前長30m、前方部後長21m、墳丘全長115m前後の墳丘規模に復原することができる。

平安時代の遺構

SB 9152は基壇上北西隅にあり、桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行8尺等間、梁行9尺等間である。柱は全て抜き取られ、抜取穴の埋土中から9世紀中葉の土師器杯が出土している。

SK 9153は大極殿基壇南側面の傾斜面に検出した直径50cmの円形土壙である。埋土中には黒色炭化物が含まれ、底面からは土師器皿4点と鉄製紡錘車が出土した。土師器皿2枚を重ね、その上に蓋をするように1枚を置き、さらに鉄製紡錘車を重ねている。この土師器は10世紀後葉のものである。

遺物

瓦類は完形に近い丸瓦、平瓦が多く、鬼瓦、熨斗瓦などの道具瓦もある。包含層から出土したものを含めると軒丸瓦は85点、軒平瓦は96点出土した。その内訳は軒丸瓦では6225A 17点・6225C 10点を含む6225型式が44点、6133型式7点、6311型式、藤原宮式各4点、6282型式3点、6296型式2点である。軒平瓦では、6663C型式44点を含む6663型式が63点、6641・6664型式が各6点、6691型式4点、藤原宮式3点、6801型式2点である。このように軒丸瓦6225型式が51.8%、軒平瓦6663型式が65.6%を占めて他型式を圧倒しており、この両者のセットが大極殿軒瓦の主体をなしていたことがわかる。

金属製品には10世紀後葉の土壙SK 9153出土の鉄製紡錘車の他に、小石敷SX 9145-B上面から出土した鉄製刀子がある。

土器は少なくSB 9152および、SK 9153出土の土師器に限られる。

埴輪は神明野古墳周濠埋土中から多く出土した。残存状態の良好な資料も少くない。ほとんどが円筒埴輪であるが、蓋形埴輪も出土している。

まとめ

今回の調査の結果、大極殿SB9150の平面及び基壇の規模・型式が明らかになり、その下層に大規模な掘立柱建物の存在することが判明した。

大極殿SB9150の造営時期を出土した瓦を中心に検討してみる。先に記したように軒瓦6225・6663型式の組合せがSB9150の造営に関わる所用瓦であったと考えられる。大極殿回廊東南隅と東朝集殿（第48次調査）の2ヶ所で出土した瓦をみると、大極殿回廊では6225A・6663C型式がそれぞれ60%を占め、東朝集殿地域では6225型式71.2%、6663型式88.6%である。両地区とも6225・6663型式の組合せが他型式を圧倒している。このことから、大極殿、回廊およびその南の朝堂院地区の造営は、一体となって実施されたことがわかる。6225・6663型式は平城宮第Ⅱ期（養老5～天平17）に位置付けられる。

『続日本紀』天平15年12月26日条に「初壇平城大極殿並歩廊。遷造於恭仁宮四年於茲。」という記事がある。恭仁宮大極殿については、昭和51年度の京都府教育委員会の発掘調査結果によると、桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟建物で、柱間寸法は身舎桁行17尺、梁行18尺、庇の出15尺である。これはSB9150より大きく、天平12年に恭仁宮に運ばれた「平城大極殿」はSB9150ではありえないことになるが、この問題は、大極殿基壇築成工事における前記の工程を一時期とみるか、二時期に分かれるかにも大きく係り、今後の検討に委ねたい。

大極殿の廃絶に際しては、建築部材をはじめ、礎石、基壇化粧石にいたるまで短期間に意図的に抜き取り、運び去っていることが、瓦片や凝灰岩片の埋没状態などから明らかになった。廃絶時期を示す遺物は皆無であるが、その廃棄状況から長岡遷都（延暦3年）または平安遷都（延暦13年）に関連するものと思われる。

下層遺構の大規模な掘立柱建物SB9140は大極殿と同一の中軸線上に建ち、柱間寸法も大極殿身舎と等しく、また、発掘区西端のSB9141はSB9140の西脇殿にふさわしい位置にある。いっぽう、すぐ北に隣接する地区は奈良時代当初から内裏的性格を維持していたことが従来の調査研究により解明され、そうとすればSB9140は内裏の南に位置する公的空間の正殿と考えられる。

IV 平城京の調査

① 右京一条三坊三・四坪の調査（第112-1次）

調査地は西大寺東門の東約70mの位置にあたる。本来西大寺の寺地に含まれる一画であり、元録年間作製の『西大寺伽藍絵図』には西大寺の付属建物が描かれている。また西大寺造営以前には、右京一条三坊の三・四の坪にあたり、坪境小路等の西大寺以前の遺構の存在も予想される地区である。このため三・四坪にわたって幅5m、長さ72mの南北トレンチを設定し、一部拡張部を含めて総面積490m²を発掘した。

調査地は水田であり、床土を剥ぐと中世の攪乱層となり、その下には奈良時代の整地土層はなく、すぐ地山に達する。表土から地山までの深さは50~70cmで、北が高く南が低い。遺構はすべて地山面で検出し、掘立柱建物3棟、塀1条、大小の土壙多数がある。

SB 03は桁行3間、梁行2間、8尺等間の東西棟建物で、北で東にふれている。

SB 06・07はいずれも東西棟と思われるが、全体の規模は把握できなかった。

SA 05は東西方向の塀で、2間分を検出した。
柱間寸法は6尺等間である。

SD 11は調査区の西辺にある幅約1.4m、深さ約0.2mの南北溝で、南は中世の土壙SK 09で切られている。



第7図 第112-1次調査遺構図

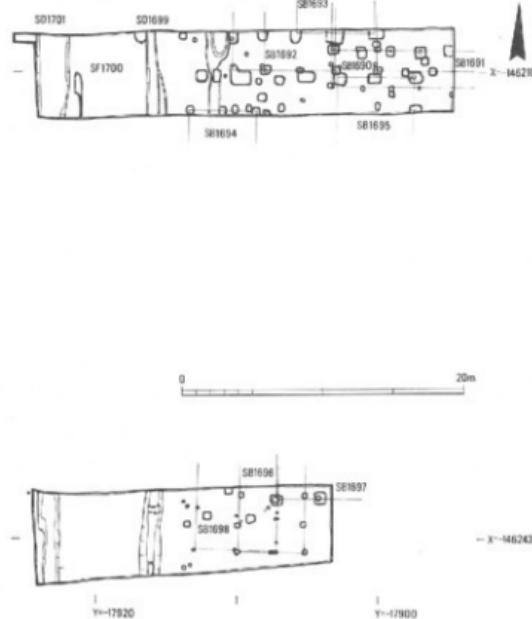
SD 10はSD 11に接続する幅約1.3m、深さ0.1mの東西溝である。

発掘区北部と中央部で大小多数の土壌を検出したが、すべて中世に属す。SK 08は幅約5.5m、深さ0.1m程度の南北にのびる浅い土壌で、北はSK 04に、南はSK 09に切られている。SK 01・02・04・09はいずれも瓦器、羽釜を含む。SK 02は東西方向にのびる土壌であるが、溝の可能性もある。

奈良時代に属する土器は少量で、瓦器、羽釜、灯明皿等の中世土器が大半を占め、大小さまざまな土壌から出土している。瓦類はほとんど出土しなかった。

奈良時代に属すと考えられる柱穴は浅く、痕跡しか残さないものもあり、この地域は中世に大きな削平を受けたことがうかがえる。しかし、奈良時代に属する

掘立柱の建物・塀・溝が検出された事は大きな成果であった。これらの遺構は西大寺造営以前の宅地に関係するものか、それとも、西大寺に付属するものかは、今回の調査で確定できるような資料を得なかった。また、発掘区南端近くに予想された三坪と四坪の坪境の小路は削平を受けて検出されなかった。



第8図 第112-3次調査遺構図

② 左京三条二坊七坪の調査（第 112 - 3 次）

調査地は、平城京左京三条二坊七坪の西南部にあたり、宅地遺構および二坪との坪境小路が想定された。調査は坪境小路寄りに幅 6 m の東西トレンチを二本設定しておこなった。北トレンチは東西 30 m 、南トレンチは東西 21 m である。

遺構は耕土、床下下の暗褐粘質土整地面と、その下の灰褐粘土地面に検出した。主な遺構は掘立柱建物 9 棟、溝 2 条、道路 1 条である。

トレンチ西端にある南北道路 SF 1700 は、東西両側溝の路面幅約 5.5 m 、側溝心々間約 7 m である。東側溝 SD 1699 は幅 0.7 ~ 1.5 m 、深さ 0.4 ~ 0.7 m 、西側溝 SD 1701 は幅 1.2 ~ 2.6 m 、深さ 0.2 m である。

建物の平面規模は明らかでないが、SB 1690 、 SB 1692 は庇付きで、いくつかの柱根が残る。

遺物は瓦類、土器類のほか和同開珎 2 点が出土した。

瓦類には、丸瓦、平瓦の他に軒丸瓦 3 点、軒平瓦 4 点、鬼瓦 1 点、面戸瓦 1 点がある。軒丸瓦は 6225 · 6235 · 6307 型式、軒平瓦は 6664 · 6685 · 6691 · 6721 型式で、いずれも平城宮跡出土瓦と同范である。

土器類は、整地土中から奈良時代～平安時代初期の土師器、須恵器のほか陶瓶・三彩陶器・土錘などが出土した。SF 1700 の側溝からは土師器、須恵器が量的にまとまって出土しているほかに、綠釉陶器・土馬・墨書き土器・漆付着土器などがある。これらの年代は奈良時代初期から平安時代初期にわたっている。

今回の調査で検出した南北道路 SF 1700 から平城宮朱雀門までの距離は 665.55 m (2250 尺) である。この数値は、条坊計画の 1 坊 (1800 尺) + 1 坪 (450 尺) に相当し、SF 1700 は二坪と七坪との坪境小路にあたる。小路幅は第 83 次、第 86 次調査で検出した三条二坊七坪と十五坪の坪境小路幅 6 m と比べると若干広くなっているが、路面幅で小路の計画尺 (20 尺) とはほぼ同じである。また、整地土および小路側溝出土土器の年代によって、坪境小路は奈良時代初期から使われ、平安時代初期に坪内と道路が一体となって整地され、廃絶したことがうかがわれる。

七坪の宅地遺構は、調査地点が坪の西端であるにもかかわらず、多くの掘立柱

建物を検出した。これらは平面形式の判明するものはないが、整地土、柱掘形の重複関係から、少なくとも4時期あったと思われる。

七坪は第96次、第109次調査で明らかになった庭園遺跡（六坪）の北に隣接する。坪内の調査面積は少ないが、今回調査区での建物群検出状況や、平城宮跡出土瓦と同様の軒瓦、二彩陶器、綠釉陶器、硯などが出土していることは、坪の中心部分でおこなった第103-1次次査の結果とあわせて、七坪が京内における高級な宅地であったことをうかがわせる。

③ 北辺三坊の調査（第112-4次）

住宅建設に伴う事前調査で、建設予定地は北辺坊三坊一・二・三・四坪にまたがる。この坪境の小路の推定位置に、東西及び南北のトレンチを設定した。発掘面積は284m²である。

東西トレンチの遺構検出はほとんど黄褐色粘質上の地山面でおこなった。遺構は後世の搅乱が著しく、近世の浅い斜行溝を2条検出したにとどまった。遺物は瓦及び土器の破片が出土したが量は多くなかった。

南北トレンチにおいても後世の搅乱が著しく、主要な遺構としては、南北溝1条、土壙4基、井戸1基を検出した。

南北溝SD232は、幅約1.5m分を検出し東肩がトレンチ外となる。溝底は黄褐色粘質土の地山に及んでいるが、年代は新しく、遺物もほとんど含まない。

SK233はトレンチ中央部で東西方向に重複する土壙で、遺物はほとんど含まずSK234を切る。SK234は東西約2m、南北約3mの方形状の土壙で、東西隅は溝状となり、東へ延びる。SK235はSK234に切られる上壙で、西肩はトレンチ外に出る。

SE237はST236の北に位置する井戸である。掘形は約2.5mの方形で、その中央部分に一辺約1mの正方形で木製の井戸枠が組まれている。井戸枠は高さ約1.8m分が残存していた。その構造は、四隅に直径10cm程の丸柱を立て、上下二段に断面円形の横木を枘差で入れ、下端部外側に幅25cm、厚さ5cm程の横板を留

で組み、その外側に各面5枚ずつ二重に縦板を並べて囲っている。この井戸は出土遺物の年代から平安初期のものと推定される。

遺物は、この井戸から土器器の杯C一点が完形品で出土したほかは、いずれも断片で、量も全体として多くない。土器類は大部分が土壤SK 234～6から出土し、年代も奈良時代後半から平安時代のものが多い。

以上のように、当初予想された坪境の小路は、トレンチ内では、後世の搅乱のために明らかにすることできなかった。

④ 北辺二坊の調査（第112～7次）

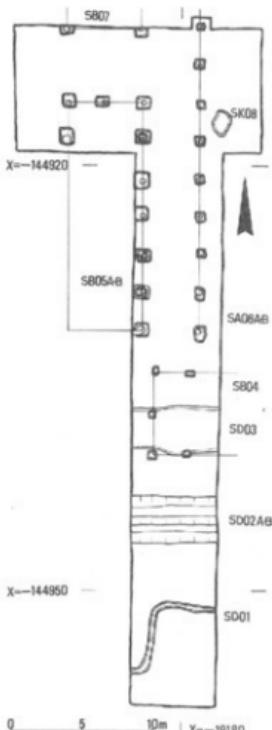
駐車場造営に伴う事前調査。西側隣接地は、昨年度の調査（第103～16次）によって、平城京右京北辺坊二・三坪にまたがる建物群と北京極大路の遺構が明らかになっている。今回の調査では、二坪内の利用状況及び北京極大路について新たな知見が得られるものと予想された。発掘面積は約360m²である。

検出した主な遺構は奈良時代のもので、掘立柱建物3棟SB04、SB05-A・B、SB07、柵1条SA06-A・B、溝2条SD02-A・B、SD03がある。

SB04は桁行1間（8尺）以上、梁行2間（10尺等間）の東西棟建物である。

SB05-A・Bは桁行6間、梁行2間、9尺等間の南北棟建物でSB07はSB06の北18尺の位置に柱筋をそろえて建つ一対の柱穴である。

SA06は9尺等間の南北柵で、SB05・07の東14尺の位置に8間分を検出した。SA06、SB05、



第9図 第112～7次調査遺構図

SB 07 はいずれも柱間を 9 尺として柱筋を揃え、同位置での建替えが認められるなど、同一建物になる可能性がある。

SD 02 は東西溝で、新旧二時期がある。SD 02 - A は幅 1.8 m、深さ 0.5 m。SD 02 - B は幅 2.2 m、深さ 0.5 m で、SD 02 - A を埋戻したのち北に約 4 尺ずらして掘込んでいる。SD 03 は SB 04 の廃絶後にできた溜り状の東西溝で、幅 3.1 ~ 3.5 m、深さ約 0.2 m である。このほかに古墳時代の土壙 SK 08、平安時代の蛇行溝 SD 01 がある。

出土遺物は少なく、遺構と関連するものとしては、SD 02 - B、SD 03 の埋上から奈良時代末の須恵器・土師器、SB 05 の柱抜取穴から奈良時代末の須恵器甕、SK 08 から古式土師器、SD 01 から平安時代中頃の土師器椀が出土した。

今回検出した建物群は、第 103 - 16 次調査で検出した桁行 7 間、梁行 4 間の二面庇建物を含む建物群とは一部塀によって画されることから、屋敷地を界にすると考えられ、屋敷地そのものは更に東に広がっている。

⑥ 右京一条二坊二坪の調査（第 112 次 - 8 次）

駐車場造成に伴う事前調査で、発掘面積は約 350 m² である。調査地は、秋篠川東岸近くの水田で、耕土・床土下に黄褐色質土層があり、この下の灰褐色質土ないし、黄灰色質土面（地表下約 0.4 m）で遺構を検出した。

検出した遺構には、建物・塀・溝・堅穴状遺構のほか多数の土壙があり、奈良時代と古墳時代に区分できる。

奈良時代の遺構には、掘立柱建物 3 棟 SB 01・05・13、溝 3 条 SD 11・17・20 がある。建物 3 棟はともに南北棟建物で、SB 01 は桁行 2 間（10 尺等間）以上、梁行 1 間（12 尺）以上、SB 05・13 はともに桁行 4 間（10 尺等間）以上、梁行 2 間（10 尺等間）である。両建物は柱筋をそろえ、19 尺の間隔をおいて東西にならぶ。SB 01 は SB 05 の東 20 尺に位置するが、柱筋がやや北にずれる。SD 11 は SB 05・13 の北辺を西に流れる幅 0.3 ~ 0.5 m の東西溝である。SD 17・20 は平行して南に流れる幅 1.2 m 前後の南北溝で、両溝を側溝とする道路 SF 18 は二・七坪

の坪境小路と考えられる。溝心々で 8.3 m (約28尺) あり、西一坊大路心からの距離は480尺を測る。

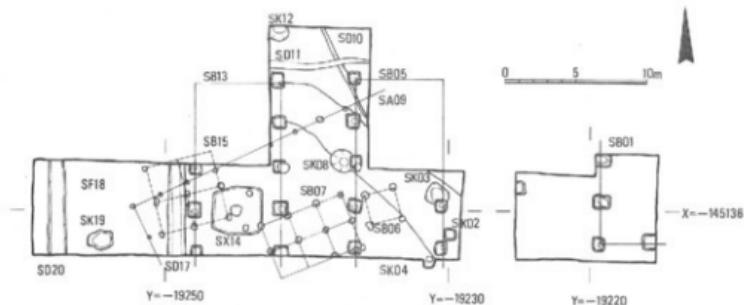
古墳時代の遺構は、切り合い関係及び出土遺物などから3小期に区分できる。

古墳時代A期にはSX14、土壙SK02・03・08・19などがある。SX14は一辺約 3.4 m 、深さ 0.2 m のややいびつな方形の堅穴住居址で、中央に炭化物を含む径約 0.7 m の円形炉址、隅の2ヶ所に浅い方形の柱穴がある。4世紀に属す。

古墳時代B期には掘立柱建物SB06・15がある。SB06は桁行、梁行とも1間 (2.3 m)、SB15は総柱建物で、桁行2間 (5.0 m)以上、梁行2間 (5.0 m)である。

古墳時代C期には掘立柱建物SB07、柵SA09・16、溝SD10がある。SB07は総柱建物で、桁行3間 (6.3 m)、梁行2間 (4.2 m) である。SA09・16はSB07の北西及び南西を画す。SA09は8間 (16.8 m)以上で、さらに東にのび西端では南に直角に折れる。SD10は幅 0.2 m で、SA09に直交して東南方向に流れる。SB07の柱穴出土の須恵器片によって、C期は古墳時代後期と考えられる。なお、発掘区東辺で東南方に蛇行する小路は古墳時代以前である。

出土遺物はそれほど多くない。奈良時代の遺物としては、SB05の柱穴から奈良時代後半の須恵器壺、SD17・20から奈良時代の丸・平瓦が出土している程度である。古墳時代では、SX16・06・08・19から古式土師器が一括出土した。



第10図 第112-8次調査遺構図

今回の調査の結果、これまで西一坊大路心から西450尺に位置すると推定された二・七坪の坪境小路は、からに30尺ずれて検出されたこと、また、坪内は建物の規模が大きく、しかも南北棟建物を東西に整然と配置しており、一般の宅地というよりむしろ官衙的性格を示すものであることなど、新しい知見を得た。

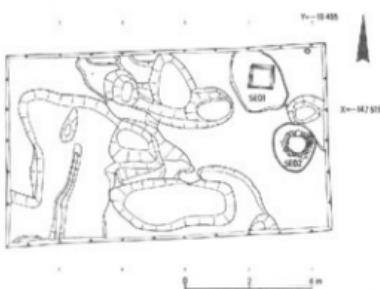
古墳時代の遺構は昨年第103-7次として調査した北東の隣接地でも検出されており、今後の調査によって集落の様相が更に具体化されるものと思われる。

⑥ 右京五条二坊十二坪の調査（第112-9次）

家屋新築に伴う事前調査として、平城京右京五条二坊十二坪内の調査をおこなった。発掘面積は60坪である。

土層の堆積状況は床上の下に灰褐色・暗灰粘質土層があり、その下は地山の灰白土である。遺構は床土下30cmの暗灰粘質土上面で検出した。主な遺構は平安時代の井戸SE01、中世の井戸SE02と多教の土壙である。

SE01は上下二段にわかれる。下段は方60cmで、厚さ約5cmの板を3段の井籠組みにしている。上段は方80cmで柱を四隅に立て、各辺に縦板を3枚ずつ並べている。上段は側板の下部分が残存しているだけであるが、井戸枠の組み方は隅柱に横桟を渡して縦板を固定したものと考えられる。井戸の底にはバラスを敷いている。井戸掘形の大きさは1.3m×1.8mで、深さ約2mである。この井戸は掘形及び埋土から出土した土器により平安時代と考えられる。



第11図 第112-9次調査遺構図

SE02は丸・平瓦や河原石を使用して積上げた瓦積みの円形井戸で、上方は直径55cm、底は直径95cmほどである。井戸掘形の平面は卵形で長径約150cm、短径約130cm、深さは約115cmまで確認したが、さらに深い。この井戸は掘形出土の土器から中世に降るものと考えられる。

その他、発掘区の西側で大小多教の土壤を検出した。土壤の平面形は不整形で深さは40cm前後である。これらの土壤は地山の灰白土がミガキズナに使用できることから、地山土を探集した穴と思われる。

遺物はSE01から土師器・須恵器・綠釉陶器・黒色土器が出土した。またSE02の使用瓦には奈良～中世までのものを含み、軒瓦の中には瓦当面に薬師寺、唐招提寺の文字を飾ったものがある。他に土壤から、中・近世の瓦が出土した。

⑦ 南面大垣の調査（第112～11次）

この調査は、平城宮南面の東西水路改修に伴う事前調査としておこなったものである。調査は宮の南面大垣遺構および、朱雀門遺構の有無を確認するために、5ヶ所にトレーンチを設定しておこなった。調査の結果、朱雀門の位置では門の基壇と礎石抜き取り痕跡を東西方向で5間分検出し、この西側に設定したトレーンチにおいて南面大垣遺構の残存を確認した。他のトレーンチでは何らの遺構も検出できなかったが、その位置は孺地に相当する。

朱雀門の礎石抜き取り痕跡には、6ヶ所とも直径20～40cmの根固め石がよく残り、掘形も浅く残る。基壇の基礎は掘込み地業によってなされ、東西31.6mの規模である。掘込み地業の深さは、発掘区が狭少なため約1.3mを確認するにとどまった。築成上は5～10cmの厚さで、黄褐色砂質土や礫を含んだ粘質土であり、これらを瓦層に積みあげている。

門の平面規模については第16・17次調査（昭和39年）で桁行、梁行ともに17尺等間という成果を得ている。今回検出した桁行5間分の根固め石は、前回の調査で検出した棟通り柱筋から17尺南にあり、朱雀門の全柱位置を確認した。

南面大垣は、地山まで削って整地を施した面に、砂質土や粘質土を互層に積んで版築している。良好なところでは約0.8mの高さで残っている。大垣基底部の地山面と、今回改修を行う水路をへだてた南側の地山面とでは、大垣基底部が若干低いので、大垣築成にあたって掘込み地業がなされた可能性が認められる。

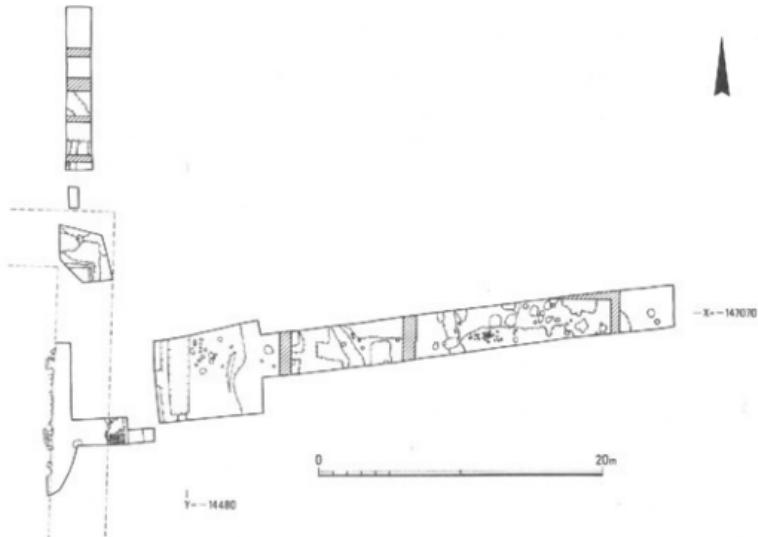
遺物は瓦類だけで、軒瓦は全て藤原宮式に属し、前回調査と同じ状況である。

V 頭塔の調査

調査地は奈良市高畑町の史跡頭塔に東接する旧奈良地方法務局の敷地で、奈良県立老人福祉センターの建設にともなう事前の発掘調査を実施した。同時に頭塔の一部も発掘調査した。検出した遺構は、老人福祉センター建設予定地では、南北方向の大溝1条、史跡地内では塔基壇東端や第1段の壁体を確認し、新たに石仏1体を検出した。

老人福祉センター建設予定地の調査 東西50m、南北40mのほぼ長方形の敷地南端に南北3m、東西37mの東西トレンチ、敷地西端に東西2m、南北12mの南北トレンチを設定した。

当地は旧奈良法務局の建物基礎が隨處に残り、発掘区全体にわたる擾乱がはげしい。東西トレンチ・南北トレンチとともに、厚さ約10cmの表土の下が中世から現代までの遺物を含む茶色砂質の包含層であり、包含層の下が黄褐色粘質の地山で



第12図 頭塔・老人福祉センター内調査遺構図

ある。地山は東が高く西へゆるやかに下る。この地山面で小柱穴、溝、土壙などを検出した。しかし、東西トレンチ西端で検出した南北溝をのぞけば、他はすべて中世から現代のものであり、規模・性格は明確でない。

南北溝は幅6m、深さ1mの素掘り溝で、堆積土中から瓦類とともに土師器・須恵器・瓦器などの上器類が出土した。これらの出土遺物から同溝が平安時代後期に廃絶したと考えられる。この溝は後述する頭塔基壇東端から東4mの位置にある。頭塔の北に接する南北トレンチでは、これにつながる溝は検出されなかった。南北溝は等距離で頭塔をめぐるものではないが、頭塔に関連したものであった可能性は高い。

史跡地内の調査 東面第1段の中央石仏の周辺と、東北隅との2ヶ所を調査した。東北隅では後世の攢乱のため顕著な遺構は検出されなかつたが、中央石仏周辺では、石仏を中心にその北・南・東の三方を調査し、石仏前面を南北にはしる壁体石組み、石仏1体、塔基壇東端を検出した。

壁体石組みは自然石を垂直に積み上げたもので、中央石仏の前面50cmの位置に東面をそろえて南北にはしる。中央石仏の北は6.5mまで検出し、さらに北へつづく。中央石仏から南では2.8mまで石組みが残り、これより南では石が抜きとられている。石組みは基底をほぼ水平にしてもっとも残りのよい所では上下3段、高さ約80cmである。ただし、中央石仏と今回新たに検出した北石仏間の前面の石組みは2段で、基底からの高さは前者では45cm、後者では50cmである。

中央石仏から北5.3m、壁体石組みから西50cmの位置で石仏を検出した。最大横幅76cm、縦70cm以上、厚さ約10cmの偏平な花崗岩立石で、東面に浅い線彫で仏像を描いている。像は「古維摩詰経」卷五問疾品にもとづく維摩詰居士と文殊菩薩の法論を主題としたもので、床机に坐した維摩詰をむかって右に、蓮台に坐した文殊を左に配し、文殊の左後方に三羅漢がしたがっている。

塔基壇は中央石仏の前方、壁体石組みから東4mの位置で、南北方向にはしる基壇東端の石組みを検出した。基壇端は自然石を垂直に積み上げたもので、最高3段、高さ70cmまで残る。基壇上面は西から東へゆるやかに下り、壁体基底と基

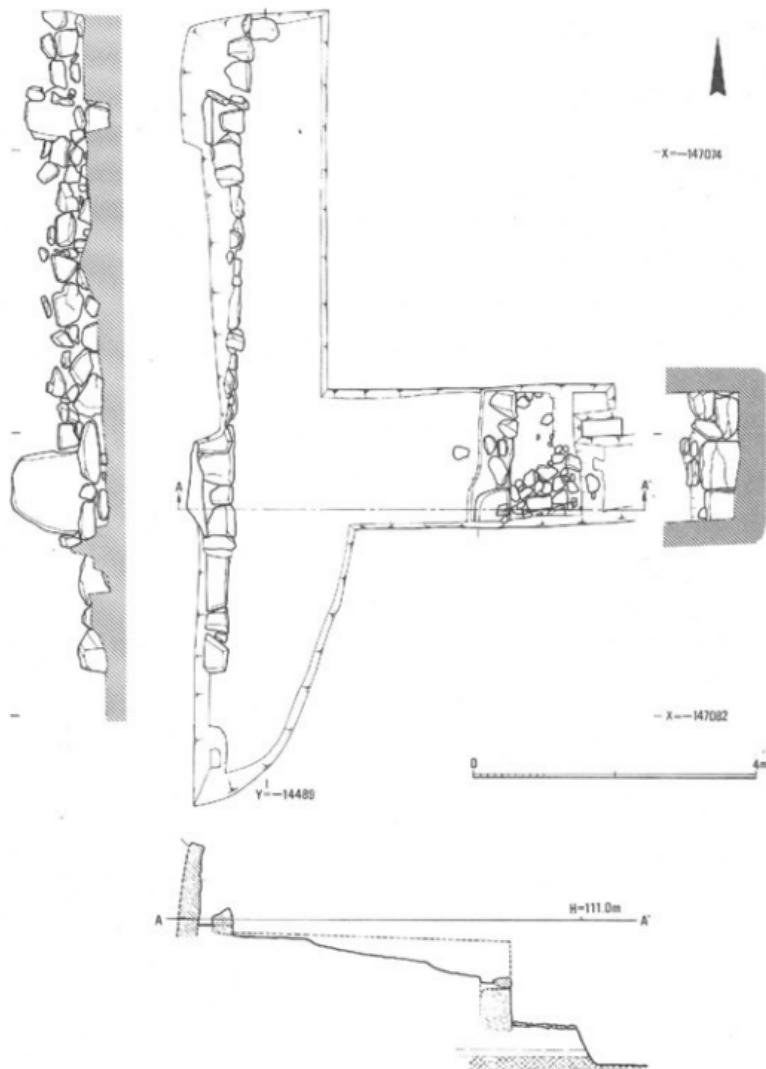
壇端石組み上端との比高差は50cmである。基壇上面には自然石ないし切石による化粧の痕跡はない。

基壇外周は人頭大からこぶし大までの自然石による平坦な石敷となっている。基壇端から東1mまでは石敷が比較的よく残っているが、それより東は後の搅乱によって切りとられており、石敷の本来の幅はわからない。

まとめ 頭塔については、当研究所がやって地形測量をおこなっている。これと今回の調査結果をあわせて頭塔の規模を復原すると、基壇は一辺32mの正方形に復原できる。第1段壁体は一辺24mに復原でき、壁体の3ヶ所に設けられた龕の中に各1体の石仏が安置されている。東面では、中央石仏と今回新たに検出した北石仏との心々距離は5.3mであり、いくぶん内寄りではあるが、一辺の壁体を四等分する位置とみることができる。また、壁体基底と基壇石組み上端とは現状で50cmの比高差がある。しかし、基壇上面は本来水平あるいは、それに近いものと考えられ、これによって基壇高を復原すると1.2m(4尺)となる。

いっぽう、基壇外周の石敷の下と基壇東北隅との2ヶ所で、地山と盛土との関係を確認した。東北隅では黄色粘質土地山の上に黄褐色粘質の盛土がなされ、石敷の下では地山と盛土との間に厚さ約20cmの黒色土が介在する。黒色土は旧表土と考えられる。頭塔築造に際して、地山の高い北側では旧表土や地山を若干削平し、地山の低い南側や西側ではむしろ盛土をおこなって基壇を形成したものと想定される。盛土は大まかな互層状を呈し、高さ10mに近い頭塔全体が盛土によって築かれたことが確実となった。

さらに、現存する石仏すべての位置を測量した結果、頭塔南北主軸線はほぼ真南北であることが分り、頭塔南北主軸線が東大寺大仏殿中心線と一致しないこととなった。しかし、今回出土した奈良時代の瓦は、軒丸瓦12点、軒平瓦23点ともすべて東大寺式瓦であり、頭塔が東大寺と密接な関係をもっていたことが前にもまして確実となった。



第13図 頭塔調査造構平面・立面・断面図

VI 寺院の調査

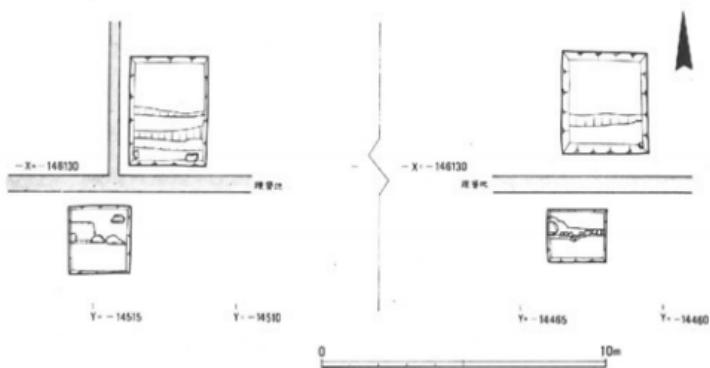
① 東大寺の調査

調査地は奈良市雜司町の東大寺学園校庭内である。同学園は東大寺南大門の西に近接し、校庭南限を画する東西築地塀が創建東大寺の南面大垣とほぼ一致するため、築地塀に接して北側に2ヶ所、南側に2ヶ所、計4ヶ所の発掘区を設定し南面大垣の遺構を一部検出した。

東西築地塀の北側では、現地表下1.6～2.4mで地山となる。この地山の上、発掘区南端に幅約1mの大垣基壇を検出した。基壇は高さ0.6～1.1mまで残り、南が高く、北は急激におちこんでいる。基壇化粧は残らず、基壇積土には遺物を含まない下層と、瓦類を少量含む上層とがある。

基壇の北側は、北でわずかに高くなる平坦面で、北岸は調査できなかったが、大垣北雨落溝と考えられる。溝内には粘土と砂、土が互層に堆積し、堆積土中から多量の瓦類、土器類とともに鉄刀1点が出土した。堆積の上面は北へ下る傾斜面をなし、この面は人頭大の自然石による石敷となっている。

東西築地塀の南側では、現地表下0.7～0.8mで、東西方向の石列を検出した。



第14図 東大寺南面大垣遺構図

石列は南面をそろえて自然石を並べ、石列の南側は一段低くおちこんでいる。

大垣北雨落溝から出土した上器類には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器があり、平安時代中期から末期に属するものである。雨落溝上面の石敷からは鎌倉時代に属する土師器・瓦器が出土した。

瓦類では軒瓦が21点出土した。時代別では、江戸時代2点、鎌倉時代5点、平安時代1点、奈良時代13点で、奈良時代が最も多く、次いで鎌倉時代のものが多い。奈良時代の瓦はいずれも東大寺式である。

奈良時代の大垣基壇については北端しか検出することができなかった。しかし南大門の中軸線をもとに復原すると、大垣基壇の南北幅は6m(2丈)となり、先年調査した西面大垣の幅と一致する。北雨落溝は平安時代で廃絶し、ついで、石敷を雨落とする築地が築かれたと考えられる。築地塀の南で検出した東西石列については年代を知るだけの遺物を伴わないが、これを築地基壇とすれば、南大門との関係では南北幅3.3m(1丈1尺)に復原することができる。

② 薬師寺宝積院の調査

薬師寺宝積院庫裡新築工事に伴う事前調査として、昭和53年12月11日から同25日まで、約90㎡の調査をおこなった。場所は創建薬師寺の北門礎石が残っている所のすぐ東南の一画で、奈良時代は苑院であったと推定され、寺藏古図によれば17世紀中頃には宝積院が建てられた所である。

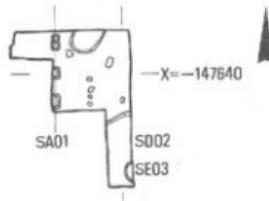
調査は南北2ヶ所のトレンチを設定しておこなった。北トレンチでは現地表下約30cmで柵・溝・井戸などを検出した。柵SA01は8尺等間、2間以上で奈良時代の遺構と考えられる。北西部は近世の土塀が崩壊した部分であるが、奈良時代の北門に関連する遺構は検出しなかった。南側では近世の東西溝SD02と溝埋上を掘り込んだ井戸SE03を検出した。

南トレンチは、地表下約30cmで灰褐砂質土を主とする厚さ約20cmの整地層があり、その下は灰色細砂を主とする地山である。灰褐砂質土面では宝積院門基壇と基壇に伴うと考えられる南北溝SD05、基壇下に入る中世の東西溝SD06のはか

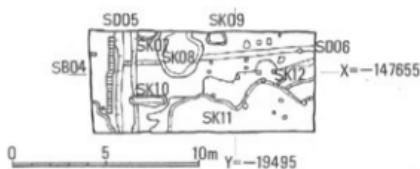
土壙 6 基と多数のピットを検出した。ピットには角杭・丸太杭の遺存するもの各 1 個と、穴の底に瓦を詰めたもの 3 個があった。瓦の入った穴は中世以前の何らかの建築物に関係するものと考えられる。土壙 SK 11 は平安時代後期から鎌倉時代にかけての多量の瓦器・土師器を含んでいた。門基壇は江戸時代の軒平瓦を含む瓦を小羽立てて化粧をし、東側柱礎石が遺存していた。門の間口は 2.9 m であった。下層の地山面では古墳時代の蛇行する南北溝（幅 1.5 m、深さ 0.3 m）と東西溝（幅 1.6 m、深さ 0.3 m）を検出した。

遺物の大半は土壙から出土したものである。瓦は整理箱で 2 箱分が出土した。薬師寺の創建時軒平瓦（6641-I 型式）2 点及び奈良時代の軒平瓦（6664-O 型式）1 点、平安時代後期の軒丸瓦 1 点及び軒平瓦 3 点が含まれている。土器類は平安時代後期から鎌倉時代にかけての瓦器の碗・皿などと、土師器の皿・甕などが整理箱で 7 箱分出土した。SA 01 柱掘立方埋土からは奈良時代の須恵器片、門基壇たち割り部の灰褐色砂質土層から奈良時代の高杯、下層蛇行溝から古墳時代の土師器、SK 09 からは羽釜がそれぞれ出土した。

奈良時代の遺構としては SA 01 以外には検出されず、遺物も非常に少ない。平



安時代後期から鎌倉時代にかけての食器類が多量に出上することは、この辺りが居住空間化したことと示すものと考えられる。



第15図 薬師寺宝積院調査遺構図

③ 法隆寺西南院の調査

昭和53年度から昭和58年度にかけて、国庫補助を受けた法隆寺境内全域の防災工事が実施されることとなり、現状変更に伴う事前の発掘調査を当研究所と櫛原考古学研究所が共同して行うこととなった。今年度は、消防道路予定地の調査を昭和53年12月7日～昭和54年1月25日の期間にわたって実施した。調査地は、現西面大垣の内側に沿った平均幅4m×全長70mの約280m²である。

検出した遺構は、基壇建物1棟、築地1条、井戸3基、溝10条などで、大別して6期に分けることができる。

第Ⅰ期 東西溝SD005、小ピットSK004がある。SD005はトレンチ内から始まりトレンチ東外へ延びる溝で、幅50cm、深さ50cmである。SD005からは奈良時代の土師器杯・皿・鉢・壺の完形に近い遺物が一括出土し、SK004からも須恵器の壺が出土した。

第Ⅱ期 明確な遺構はいずれもトレンチ北半部に集中している。最も北に基壇建物SB010がある。基壇は傾斜する地山面を削り出して水平面をつくり、その上に瓦や須恵器を多少混入した灰白色粘土を積み上げている。北半部は削平されて積土ではなく地山が直接露出している。残存高は基壇北面が約20cm、南面では50cmである。基壇南北幅は基底部で約9mを測る。基壇南側には二本の東西溝SD011・012があるが、いずれかが雨落溝であろう。

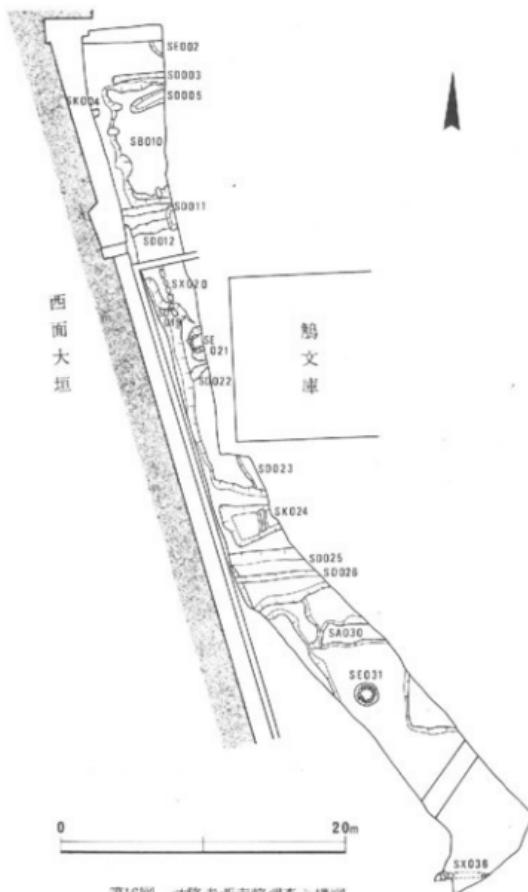
SB010の南約4mから南へ延びる南北溝SD019がある。トレンチの西壁に沿って辛うじて東肩を検出したもので、約20m南下してトレンチ外へ延びている。方位は西面大垣にはば沿っている。この溝の北端東側には、石積遺構SX020が溝と並行している。一段の石列が南北に4mづいて、SD019にとりつく。この部分はSD019の底から石が積まれていて、上段は一段低くなっている。あるいは、後述の井戸SE021からの排水口としていたのであろうか。

SE021は方形の石積井戸で西半分を検出した。井戸上面に数個の石が残るが、井戸内の積石は上端から80cm下まで崩壊していた。下方へ積石三段分を検出したが完掘はできなかった。

第Ⅱ期の遺構の年代は平安後期に比定できる。ただし、基壇建物 SB 010 は層位的にみて、江戸時代まで存続していたようである。

第Ⅲ期 東西方向につづく築地基底部と考えられる SA 030 がある。基底幅は約 1.8 m で、築地に伴う施設は残っていない。

SE 031 は円形の石積の井戸で、内径約 90cm、上端から 90cm 下に角材で土台を



第16図 法隆寺西南院調査遺構図

組み、その上に石を積んでいる。角材から下は素掘りのままである。積石の間に偏行唐草文軒平瓦一点を含んでいる。他にSD 023もこの時期である。

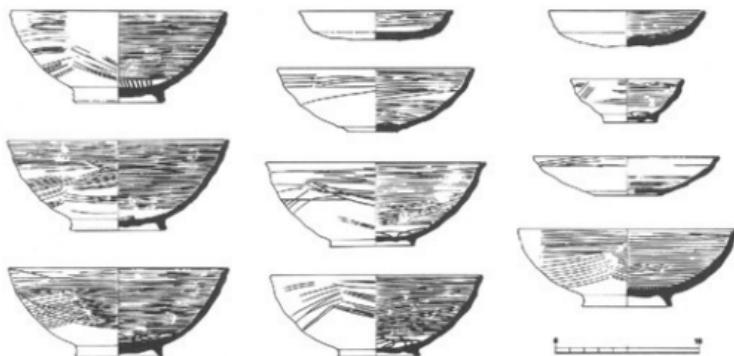
トレンチの南半部に遺構の集中する第Ⅱ期の情況は、築地塀SA 030を境にして南北の土層に著しい相違がある。SA 030以南には、炭化物を多量に含んだ砂層が幾層も重なって堆積しているが、以北には全く見られない。また、井戸SE 031の上面の石は明らかに火災に遭った痕跡を残している。SA 030の南側の一画は瓦器の年代からみて13C後半までに、火災によって廃絶したものであろう。

第Ⅳ期 築地塀SA 030の北に東西に走る大溝SD 025と、SE 002がある。

第Ⅴ期 顯著な遺構としては、二条の溝SD 003・026だけである。

第Ⅵ期 船文庫から南一帯を厚く整地して石垣SX 036がつくられている。40~50cmの大きな石を四~五段積み上げて、約1mの高さの石垣にしたもので、南に面をそろえている。この石垣を西へ延長すると丁度西面大垣が東にわずかに屈曲して延びてきた突端にとりつく位置にある。

遺物 瓦類では丸・平瓦が最も多い。軒瓦は十五点である。軒瓦中には二種類の重弧文軒平瓦が含まれている。法隆寺で重弧文の出土を見たのははじめてである。土器類としては土師器・須恵器・瓦器・磁器がある。土師器が最も多く、ついで瓦器が多い。



第17図 法隆寺出土瓦器

まとめ 調査区は、天明の「伽藍境内大絵図」、寛政の「法隆寺懇境内図」の二つの古図によれば、子院西南院にあたる場所である。西南院の創立については詳らかにしないが、「法隆寺別當次第」には元亨元年五月に中院と西南院が合戦したとの記事がみえる。これによって鎌倉時代の後半には西南院の存していたことが知れる。先述の古図中には、西南院本堂が西北隅に描かれているが、今回検出した基壇建物SB 010をその規模からみてこの本堂にあてることができる。

從来から、法隆寺の寺域を南に拡げて、現在のように築地で囲うようになったのは平安後期と考えられ、西大門も「別當次第」によれば長元年間の造立と記されている。したがって、これに近い時期に西南院が創立されたとみれば、出土遺物の年代観とも符号する。また、SB 010は先述のごとく第Ⅱ期以降にも存続していたとみられるので、江戸時代まで残って古図に描かれたのであろうか。

ところで、第Ⅱ期に南北二区画がすでに、成立していたかどうかは明確でないが、少なくとも第Ⅲ期には築地SA 030によって区画されていた。しかもそれぞれに井戸を有していることは、両区域が別の子院であった可能性を示している。おそらく西南院は北の一画にあたろう。寛政の古図には西南院の南に東西の築地が走り、南の一画には明府社が描かれていて、すでに子院にあたる建物はみられない。この築地をSA 030とすると、かっての子院の廃絶した跡地を踏襲して明府社がつくられたとみることができる。ちなみに「別當次第」には、永仁四年に「冥符社」を新造した記事がみえる。

また、天明の古図に描かれる西南門東側の東西築地は、石垣SX 036の北側には本来築地が存在したことを示すものであろう。

なお、今回の調査では、鶴文庫の北側の位置で、トレンチを西に拡張し、西面大垣との関係を検討したところ、現築地地覆石下50cmで、当初の基底部と思われる一列の地覆石列を検出した。地覆石は基壇建物SB 010や、第Ⅱ期の遺構を検出した地山面よりは40cm程上層にある。年代を限定する資料は得られなかったが、層位的にみて江戸時代に近い時期と考えができる。ちなみに、現築地架構部に用いられた古部材からは慶長大修理のものと考えられている。

④ 唐招提寺戒壇の調査

この調査は唐招提寺戒壇上にストゥーパを建設するため、その基礎工事に際して行われたものである。調査は昭和53年5月29日から開始し、同年6月22日に終了した。なお、その後も工事の進展に伴い数度にわたり補足調査をおこなった。

唐招提寺戒壇の創建年次については、同寺の草創に伴うものとする説と、弘安7年を創建とする説の二説がある。「招提千歳傳記」によれば、応永年間にも戒壇の補修を行っているが、中世以降の状況については不明である。近世では慶長元年の大地震によって、他の堂舎とともに戒壇堂も倒れ、元禄8年に將軍綱吉の生母桂昌院の寄進による再興工事が始まり、同11年9月に落成法要が営まれた。現在の戒壇院はこのときの姿をとどめるものであるが、このとき建立された覆堂は嘉永元年の火災で焼失し、その後戒壇は大正年間に修理の手が加えられた。

戒壇の外観は三段からなり、最下段は正方形基壇で一辺16.0m、高さ0.75m、南面に東西11.2m、南北2.5mの張出しをもつ。戒壇本体は基壇中央部の方11.0m、高さ2.3mの部分で二層をなし、第二層の上面中央部には2.2m、高さ0.1m程の花崗岩製切石を組んだ結界石をのせる。これは戒壇第三層にあたる。

遺構 戒壇封土の土層は下層から地山、版築土層、元禄期盛土層、大正修理土層である。地山は上部では黄灰褐色の粘質土であるが、下方にゆくにしたがい土質はシルト状となる。壇の中央部では周囲の地山面より1.2m程高くほぼ水平であるが、戒壇第二層の地覆石下方でゆるやかにさがり、再び平坦になって基壇端まで延びる。基壇敷石は地山面上に厚さ5cm程のしつくりを敷いて据え、元禄再興戒壇堂の向拝にあたる南面の張出基壇も、地山を削出して造成している。

版築土層の土質は地山の上層部と非常によく似ている。地山を削出した中央部の高まりを覆うように積む。地山面から0.6mほどは数層に粗く積み、その上方は細かい版築状となる。中央部が最も厚く、全体で約1mあり、上面は周囲にむかってゆるやかに湾曲している。周縁部は戒壇第二層基壇化粧のウラゴメに削りとられている。この版築上層と上層の元禄期盛土層の間に厚さ0.1mの暗黄褐色層がみられる。

元禄期盛土層は厚さ 0.6 m 程で瓦片を多量に含む黄褐色土と、灰褐色の粘土斑を混じえる粘質土の二層がある。

大正期修理土は厚さ 20~30 cm で暗黄褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の二層に別れる。

元禄期盛土上面で、元禄再興の戒壇堂の遺構と思われる礎石抜取跡、それにスリバチ状の掘り込みを検出した。また暗黄褐色土上面で小建物跡、土壙各 1、小ピット多数を検出した。

元禄期戒壇堂の遺構は径 50 cm、深さ 15 cm 程の方形あるいは円形の浅いくぼみ 4 個で、奈良県所蔵の戒壇実測図にみえる戒壇第二層上面の礎石配置と一致する。

スリバチ状遺構は上端の径約 2.5 m、深さ 0.6 m で性格不明である。この位置が戒壇第三層の直下にあたるので、そのための地業と考えられなくもないが、特に丁寧な仕事をしているわけでもなく、特別の埋納品を納めた形跡もない。

小建物は 1 間 × 1 間で、暗黄褐色土が周間にむかって落ち込む肩のところ、東南東北、西南の 3 つの隅で、長径 0.6 ~ 0.75 m、短径 0.4 ~ 0.5 m、厚さ 10 ~ 25 cm ほどの自然石の礎石 3 個を検出した。西南隅は抜取られている。版築上層を浅く掘込んで礎石を据え、その上面にそろえて暗黄褐色土を積む。礎石間の距離は東西、南北とも約 2.8 m である。

暗黄褐色土面を切り込んで、不整形な土壙 1 個と小ピット数個がある。土壙からは炭化物とともに小埠仏、鉄製・銅製の飾金具、釘、鉢、金箔などが出土し、恐らくは厨子の焼滓を廃棄したものと考えられる。小ピットの性格は明らかでないが、このうちのひとつからキセルの吸口が出土した。

出土遺物には瓦・埠仏・土器・金属製品などがある。

瓦埠類では古代から近世に至る瓦片と埠仏が出上した。瓦は元禄期盛土中に多く、特に黄褐色粘質土に多量の瓦片が含まれていた。軒瓦は軒丸瓦 7 点、軒平瓦 6 点があり、このうちに緑釉軒丸瓦 1 点が含まれる。6282・6282G・6236・6236D・6316B・6572型式があり、6572型式を除けば奈良時代末から平安時代にかけての瓦である。一般の丸・平瓦では緑釉の認められるものが丸・平 1 点ずつあった。埠仏は完形品 4 点、破片を含めて 12 個体分がある。暗黄褐色土上面の炭化物を含む

土壤埋土中から出土した。大きさは縦4.05cm、横2.3cm、厚さ0.4cmで、蓮華座に結跏趺坐する如来像を表面に浮彫りする。天蓋、衣裳など精緻に造出しており様式からは8世紀後半と推定される。

土器類には瓦器片、須恵円面硯片、綠釉陶器片がある。瓦器片は元禄期盛土全体に含まれる。いずれも中世以降のものである。円面硯は奈良時代、綠釉陶器片は平安時代のもので元禄期盛土の黄褐色粘質土層から出土した。

金属製品には元禄期盛土・元禄期のウラゴメ土・暗黄褐土層から鉄釘が、元禄期盛土からは鉄鍋の脚が出土した。また、前述のキセルの吸口は積土の時期決定に重要な資料となった。そのほかの金属製品は前記のようにほとんど博仏とともに炭化物層から出土している。

当戒壇の創建時期を発掘の結果から明らかにすることはできなかったが、築成の状況からみて、版築土層とその下の地山の高まりが、創建の戒壇にかかる封土であることが十分に推測される。

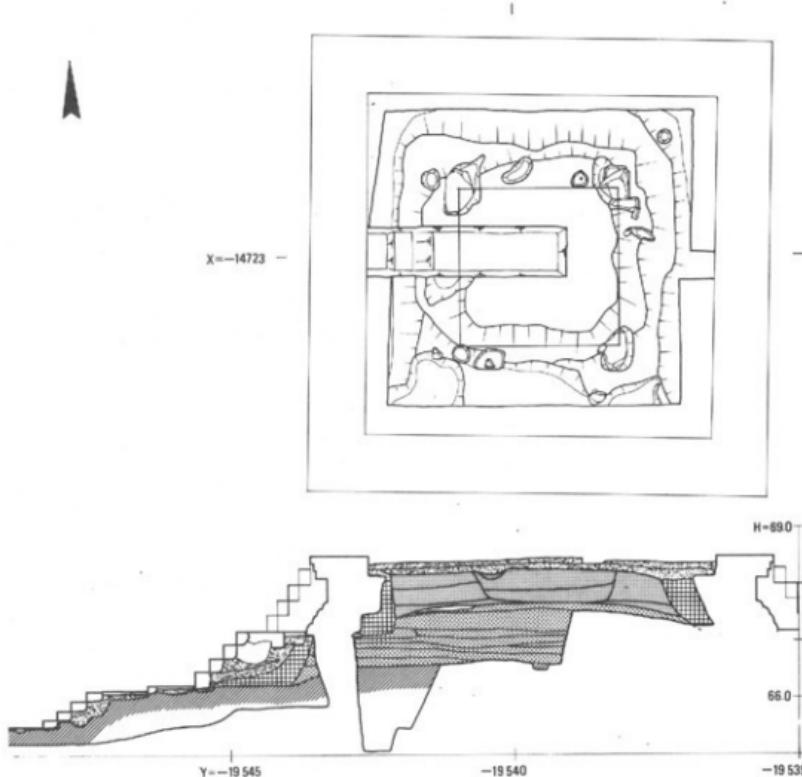
上層の状況や出土遺物から元禄8年から同11年にかけて行われた戒壇再興工事によって現戒壇の第二層以上は新たに積み加えられたことが明らかになった。このほかの工事としては周囲に築地をめぐらし、四面に門を設けるなど、外観を壮大に整え四周を整備するという戒壇の面目を一新するものであったことがうかがえる。次に、暗黄褐土上で検出した小建物の存在によって、元禄以前の戒壇の高さがこの暗黄褐土上面くらいまでしかなかったことが推定され、現在の戒壇よりはずっと低いものとなる。平面規模についても版築の層が外に向かって湾曲して



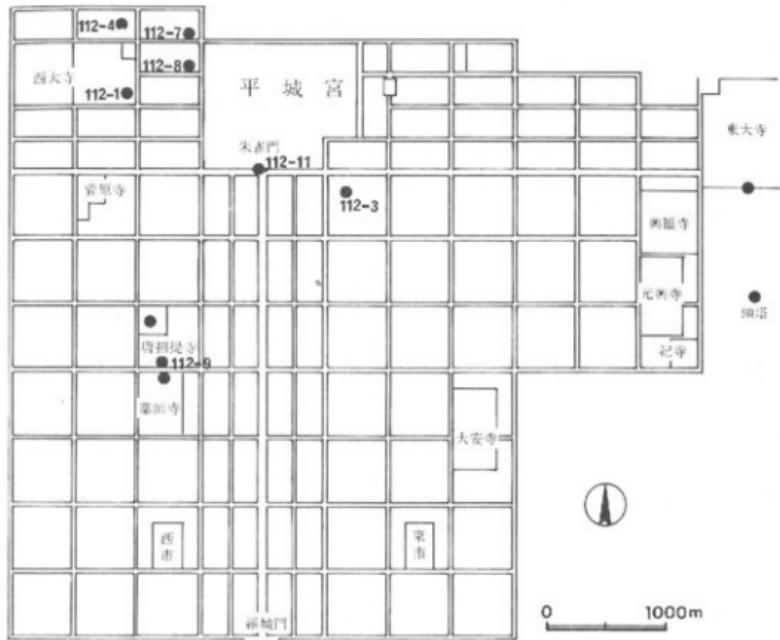
第18図 唐招提寺戒壇出土博仏

いる状況からみて現土壌よりそう大きなものではなさそうである。この小建物は礎石の状況から、仮設的な覆屋のようなものが考えられよう。「招提千歳傳記」の戒壇堂の条にみえる「文禄五年(慶長元年)大地震。此時殿堂多倒。此殿又倒。久成莓苔之地。僅有小屋覆戒壇耳。」の記事が思いあわされる。

今回の調査によって創建以来の戒壇封土が比較的良好な状態で保存されていることが明らかとなった。また、元禄再興時の工事の様相をほぼうかがい知ることができたのは収穫であった。



第19図 唐招提寺戒壇発掘追跡平面・断面図



平城京調査位置図